

ことが出来るかと諷刺した。仙崖もそれから書を餘計書かなくなつたといふことがある。今の師家の自己をうるため計りだ。ようかいて信施にあづかりたいのみだ。書を稽古するひまに一人でも多くの入室を聴かぬかい。寧ろ明窓下に古教照心でもすれば可い。詩歌もさう巧みにやるには及ばぬ。ほんに志を抒べさへすればよい。韻字や、てにをはは少々間違つてもかまはぬ。いや十分やりたいもどうしても時間がない。書畫をやつても外のつとめが十分なれば且く許すもたま／＼遠方から来た志士を門前拂ひをくはしたり入室に時間を制限して、無常迅速をかへりみぬ。遠方の招請があつてゆくと、途中でつかれを催し、經を看むのがやつと。提唱にも活氣がない。入室にも勢ひがないから、學人もかやうな室内に入るを潔とせぬやうになる。こんな風ぢやから、とかく多病ぢや。年中くすりを服ん

てゐる。死ぬることがさういやのか。病といふものは今時の醫者のなほす者でない。おれはおれてなほす。願心でぶちろすのぢや。醫者は肉體のことはようしつてをるが、精神的の治法がぬけてゐる。死ぬる時間はいつも醫者がしらぬ。白隠は三日前にしつてをつたが、醫者は分らぬ。おれは長く腎臓病がある。醫者はいろ／＼といましめるが、おれは酒ものむ。運動もする。たうがらしも食ふこともある。しかし未だ曾て吾を犯すことができぬ。こちらに満ちてゐるから犯すすまがないのであるが、疫病神はとかくよわみにつけこむ。自分ながら不思議ぢや。上來の如く病氣でも入室をことわつたことがない。死ぬる前でも入室といへばやるつもりぢや。死んだら地獄の閻魔や極樂の彌陀の入室もきいてやるつもりよ。このまねが他の師家にできるか。そんな弱いからだてろくな法子ができるものかい。お

れの一日は外の十年ぢや。七十七は七百七十ぢや。彭祖のいのちも
 おれの處にはめづらしくない。元來時は不可得ぢや。長短は人にあ
 りて時にはない。時其物は長いとも短いともいはぬ。みよ地獄の一
 日は人間の五百年。苦なるが故である。天上の一日は人間の五百年
 樂多きが故にぢや。南天の一日は少しも無駄がない。隙間がない。
 他の一年十年にまさる萬々ならずや。道元曰、可勉の一日は可悦の一
 日也。可念の百年は可恨の百年也と。至言なる哉。

六十九、南天棒は何處までも精力主義

白隠は勤の一字を大書して、其の下に天下英雄。古今聖賢。只從是一
 字出頭來とかゝれた。南天はどこまでも精力主義ぢや。餘念をまじ
 へぬこそ生ける禪ぢや。左之右之は現成公案ぢや。外に求むるは痴

漢々々。趙州は粥飯の二時雜用心の處といふたがなんの雜用心ぞ。
 めしになれ。かゆになれ。眞の勤勉は餘念なきものである。勤勉は
 直に大法のまるだしてである。空論はだめ。その物になれ。その事を
 なせ。天桂曰、足踏實地と。わが意を得たるかな。

七十、白隠達磨の贊

ふきといふも草の名。めうがといふも草の名。富貴冥加にならせ玉
 へならせ玉へ。だるま大師にならせたまへ。勤勉其物にならせ玉へ。
 あなかしこく。

この贊は室内てやかましい世語ぢや。淺草のりの味をこゝへもつて
 こいといふ公案がある。冷暖は自知底で、みせることのできぬもの
 を見せよ。出せよといふのぢや。なにちつと境界がすゝむとわけは

ない。虚空を笑はすることもできるとはでないか。印籠の二重目から富士山をだすこともできる。徳利の中へ這ひ入ることも造作はない。そんなら即今海苔の味をもつてこい。擬議せば南天棒三頓くらはす。速道々々。

七十一、獨園と越溪

獨園は大拙の法子で、大分よい處があつた。しかし坊主に法子が十人とはちと安賣であつたらう。居士は一人もなかつたやうだ。あるとき同志社の耶蘇の壯士が首をもらいに來たと突然やつて來たとき、御やすい御用ぢや。さあもつてゆけと、首をさしのべた。無功用の働きは、實にみあげた者だ。佛光の珍重大元三尺、劍にまざること七歩ぢや。又ある時佛法ざらひの劍客が、山岡の紹介で議論にきて、わしがま

けたら佛法に入るが、おまへがまけたら首をとるといふ約束ぢや。獨園笑て諾す。既にして兩人對坐するや、獨園いきなり如意を以て士の頭を打つて曰、正與麼時作麼生と。劍客機先を制せられて敬服した。この電光石火の働きは、平生の潜行密用にあるのぢや。但しこれは正受老人の手ぢや。正受老人の所へある劍客が、劍道の極意を學びにきた。かれの言未だ了らざるに劍客を打倒した。この擬議をゆるさぬ所に極意がある。それより劍客の技大いに進みしといふことがある。獨園は其手でやつたのだ。獨園は漢學者で、詩がことに特意であつた。越溪和尚にはおれも親炙した。境界は獨園よりずつと勝れてゐた。酒はおれのやうにすぎぢやつたが、あまり飲みすぎて中毒して醫者から酒を禁じられた。それで夜な夜な典座寮にぬすみにいつた。ある時典座がみつけて、泥棒々々と大喝した。越溪狼狽おく能はず。そこ

にありあふ大楯鉢を頭から引かぶり、暗い處へこそくと逃げこんだ。これがほんの頭かくして尻かくさずぢや。この境界は獨園ではできぬ。關山がをつたなら、手を拍つてほめたであらう。詩もやつたが、獨園には及ばなんだ。詩は平生の稽古で巧拙があるのだから、それで其人の價值を定むることはできぬ。ことに古人の盜句をやるやつ杯は、古人が出て来たやうな詩をつくる。うつかりのせられぬがよい。納などの詩は稽古をしたことがないから、詩家からみると半文の價值もない。それは藝に屬することぢや。境界邊に於て關係はない。獨園の詩に。道也須叟不可離。咳唾掉臂又何疑。日長讀書懶禪坐。伏看前山雲起時。結句王維から脱化し、溫藉含蓄の妙味がある。越溪のは、行脚須具行脚眼。住山自有住山機。山僧不打這箇要。一片白雲倚絕崖と。少々文字に圭角があるやうに思ふ。兩師近代叢林の

英傑ぢやつたが、嗚呼今やなし。

七十二、生寃家の思ひをなせ附葉縣省和尚

修行は親の敵をさぐる思ひでかゝれ。生はなまゝしきぢや。新しきことぢや。親の殺されたはこの頃ぢや。うらみ骨髓に徹するぢや。たとへ野の末山の奥なりともといふ意味ぢや。寃はかたき。家は人ぢや。仇をうつ人の義ぢや。芝居などを見ても、乞食などしてとうとう本望とげる。其時本人は勿論一般人の喜び如何ばかりぢや。我禪の修行もさうぢや。撥草瞻風は唯圖見性ぢや。見性は敵打なり。いかなる艱難も恥辱も忍んでゆく所まで行かねばならぬ。敵を討つ氣になつてやれ。忠臣藏の大石のやうに忍べば何事も出来るぞ。不見言。一不做二不休。

生寃家の思ひをなせ。葉縣省和尚

昔。葉縣省和尚は、大衆がなまけるとして、ゆきのふる日に水をぶつかけた。衆皆怒つて去る。浮山遠と。天依の懐とのみ去らず。和尚曰く、まだぐづぐづしてをるのか。去らずんばぶんなぐるぞと。二人近前していはく、さアお打ちなさい。われら二人數千里を遠しとせず。來つて和尚に參ず。豈以一杓水故。去るものならんや。たとへ打ち殺さるゝとも去らじというた。そこでゆるして、遠を典座めしたきにした。あまり天井粥ばかりで、大衆が不平をいふから、餛飩振舞をした。よくあることよ。例の省和尚怒るまいことか、たゞちに餛飩代を算用して、衣鉢を賣らして賠償せしめ、おまけにみな棒くらはしてたゞき出した。されど遠はうらみに思はず、友達によりて屢々入寺を乞へどもゆるされず。せめても入室だけといへど、これ又許されず。一日偶々町内で省和尚に出くはした。省云く。貴様まだこゝ

にうるついでゐるのか。まだ餛飩代ののこりがあるが拂つて仕舞と、どこまでも酷烈ぢや。遠は恨みず托鉢してとらぐかへした。省も根氣負けしてとらぐ歸單を許した。白隠は遠を僧中の忍辱仙人と褒めた。今時の奴はちとまづいものを食すと自分から出てゆく。もと修行する氣がないから、何處へ行つても食ひさへすればよいのだ。遠の爪のあかでも煎じて飲め。

七十二、大石良雄の忍辱行

睡面無憤况辱辭。丹心秘訣不許窺。臥薪嘗膽今迂計。狂舞能成亂醉姿。おれの居士で奥田の詩ぢや。

大石が現在主人を殺されながら、敵打の心なく、その上日日遊蕩三味をやるから、薩の劔客喜劔といふのが來て、大いに罵つて。貴様のやう

なものは世のけがれ國のはぢ、一刀兩斷にするやつだが、犬侍を斬るは刀の汚れ、犬扱ひにしてはらをいせんとあしの先に刺身をつけて、さア食へといつた。大石は口の先きをつけて食うた。喜劍はあきれ、つばを吐きかけて去つた。見てゐても氣の毒のやうぢや。實に不可忍よく忍んだ。しかし丹心の秘訣はたれもしりてはない。とう／＼首尾能く敵を打つた。遺教經に。忍之爲徳、持戒苦行所不能及能行、忍者乃可名爲有力大人とある。大石の如きは有力の大人といふべきものぢや。修行者も大石のやうな忍辱心があつたなら、見性の出來ぬ筈がない。二祖立雪腕をきり、慈明錐股眠らず。古人刻苦光明皆忍の徳ぞ。よう思うてみるがよい。因にいふ。喜劍は敵打のことをきいて、我に心なし。我に眼なしというて、大石の墓前に割腹した。これも大和魂ぢや。

七十四、大石の没縦跡

大石がどろつくときに若し死んだなら、忠か不忠か分りやせぬ。微露だも人に知らせなかつた。しかし其忍辱心は皇天、皇土、眼分明ぢや。成敗利鈍の關する處でない。禪者の行履もさうぢや。平生潜行密用して、如愚如魯、世に處してゆく所に妙所がある。凡とも聖とも分らぬ所に妙所がある。人をして縦跡を知るによしなからしむぢや。そこで、しりへにあるかとすれば、忽焉として前にあり。ある時は如處女、ある時は脱兎の如しぢや。この故に、君子は可欺も誣ふべからず、馬鹿のやうでも中々誤魔化されはせぬ。始終油斷のなきことは、大石底でなければならぬ。大石は盤桂に參じたものだ。一切衆生をあつかつてをるのぢや。油斷をしてどうしてやつてゆけるものか。しか

し敵が強い。又自分が油断があると、返り打にあふことがある。一生自救不了の漢となることがある。大安寺堤や、天下茶屋の敵打を見るがよい。氣の毒は氣の毒ぢやが、やはり油断ぢや。八方に眼をくばらねばならぬ。見性は即成佛ぢや。このまゝ佛になるのである。あに容易の看をなすべけんや。毫厘有差千里懸隔。

七十五、大石も失敗があつた

大石の行跡は敵も味方も注目した。しかしどうしても本心を窺ふことが出来なんだ。只一味の者だけが知るのみぢや。しかし大石の如きものも稀には失敗がある。修行者もどんなにぬけきつたやつでもくせがでることがある者だ。洞山も米をまきちらしたを見て心を起して土地神に縦跡をみつけれられたことがある。大燈が二十年。關

山が八年。山や川で聖胎を長養したもくせをとりたい計りぢや。大石が一力樓のかへるさ大いに酔うて山科の茶屋によつたら、亭主がかはせみの畫に贊を乞うた。すぐにやつた。「濁江の濁に魚はひそむとも、など川蟬のとらでおくべき」とやつた。危険々々大危険。おれは敵を打つぞといはぬ計りぢや。尾毛既露といふやつぢや。幸に同味の人即後室のまはし者にみつけれられて、後室を安堵さするだけですんだは天の賜なるべし。もし敵方にみられたら、多年の苦忠は水の泡となつたであらう。法執といふやつは、どうもとれ難いものだ。執は臭である。魚をやいても臭がのこる。雲門云、透得一切法空隱々地似有一物相似。亦是光不透脱と。光を認むれば光惑といふ者になる。見性は思ひもよらぬぞ。

七十六、馬鹿になれ

どうも賢くなりたがる。人にほめられたい。これを勝他の念といふぢや。馬鹿にはなれぬ。公案を覺えたがる。すてることができぬ。坐禪をするにも何か曰くがつく。注脚が加はるやうぢや。皆これ禪病である。禪は只馬鹿になればよい。其馬鹿さ加減は修して知るより外はない。關山は雨の漏るのに箆を以てうけとめた小僧をほめた。茶摘女が雨にぬれるとて、茶の木を根から皆きつて家の内で摘ました。とてもめの勘定では分らぬ。もとより馬鹿の者が馬鹿になるのなら別に殊勝ではないが、十分智慧のあるのに、その智慧をすて、馬鹿になるといふのぢやから一寸合點のいかぬ所ぢや。馬鹿のする仕事は單一ぢや。工むことがない。意識がない。分別がない。相

手を見ない。借金取も馬鹿には困る。釋迦が来て説けども悟らふと思ふ念は毛頭起らぬ。地獄の使ひも手を拱いで去る。馬鹿につける薬はない。病ありともおもはねば衲は達者だとも氣がつかぬ。少しもとり所のない用ひ所のないのが馬鹿の働きぢや。さあ即今馬鹿になつてこい。おれはすぐに印可を與ふるぞ。おれの室内にくるやつで、大分境界のすゝんだやつにでも、まだ智慧が出る。公案を智慧でさばく内はだめぢや。意根下の卜度はおれの處には入用はない。馬鹿になつてこい。と何度いうてもとりあげぬ。これが南天。下で露がたるといふ難關ぢや。大抵は馬鹿になりおほせずして、賢い。まゝ一生を棒にふつてしまふやつばかりぢや。

七十七、寶鏡三昧

洞山の寶鏡三昧に、潜行密用。如愚如魯。但能相續。名主中主とある。相續が六ヶしい。時として境に奪はるゝ。寤寐恆一といかぬ。魔に窺はるゝものよ。逆境に逢ふと、平生の意氣も志操も何處へやらいつてしまふ。馬鹿の修行が十分でない證據ぢや。潜行は不露なりとある。きはだたぬ。何をしてをるのやら分らぬ。くさみがないのぢや。凡とも聖とも分らぬから、天人花をふらすに由なしぢや。密用は不覺なり。悟りをわすれてしまふた。佛祖が何をいつたやら、浮世のさかもしらずねにけりぢや。作用につきあたるものゝないのが密ぢや。開已無外ぢや。おつばらうた所ぢや。しかしおつばらうといふものもない所が密ぢや。そこが馬鹿のやうに見えるが、つきあたるものがないから、案外馬鹿どの自在力がある。馬鹿さ加減は自修するより外はない。昨夜泥牛入海去。直至如今不見跡。泥牛にな

れ泥牛になれ。

七十八、祖英集革轍二門頌

祖英集は雪竇の血滴々ぢや。中に就て革轍二門は大事ぢや。革は掃蕩門ぢや。なにもおつばらうた處ぢや。天地無寸土。山是非。山是非。水是水。山是山。水是水。柳緑花紅ぢや。水是水。山是山。何にも無い處から、差別の境界にうつていてたのぢや。しかしこれは口先佛法ぢや。今は其真底の二門を詩想に寄せたのぢや。一説にこれを轍を革むるとよむ。佛法も何も建も掃も打推きて、未生已前の面目となりきり、なにも見ず聞かずの消息をのべたるものとするのがある。埒を破つて埒をまもる。格をはずして格に合ふ處ぢや。古來二字の説紛々ぢや。まあこゝへらでよからう。四首の中前一首が尤もよい。

徳雲閑古錐。徳雲比丘の馬鹿野郎。さあこの馬鹿野郎ぢや。古來この馬鹿野郎に生命とらるゝものかず知れぬぞ。幾下妙峯頂。何の用があつて高い峯を下つたり上つたりするのだ。馬鹿野郎めが。無駄の事はよせばよいのに。備他痴聖人。徳雲の馬鹿さ加減沙汰のかぎりぢや。どんなことをしてをるかと思へば馬鹿正直な人を備つて来て、己れもともく、に雪を擔つて来て、井を埋めやうとして、汗になつてやつてゐる。なんと馬鹿もこゝに至りては極れりといふべしでないか。借問す雪で井が埋もるものかな。

これは華嚴經の故事で、善財童子が五十三人の善知識に歴參した、因縁ぢや。奥には奥がある。山上尙山あることを佛が説かれたのだ。善財童子がもうこれでよからうと腰を据ゑる氣味があつたから七佛の師たる文珠が。いや、まだ露がたるぞ。そんな所でよいと思ふと、

入地獄如箭ぢや。妙峯頂の徳雲和尚に相見せずんば、後になり臍をかむの悔いあらんと訓戒した。今は斯様な人がない。昔は人物に富んでゐた。どうもこれでよいと腰を据ゑたがる。役にたゝぬ者にしてしまふ。善財は正直ぢや。文珠の指圖に従ひ、妙峯頂にいつて徳雲比丘をたづねたが、何處を尋ねてもをらぬ。見る事が出来なんだ。求むれば得られぬ。ある日偶々意外の山で出會して最後の説法を聽く事を得た。これが別峰相見とて室内でやかましいやつぢや。偶々とは不用意ぢや。求心止時ぢや。幾下の二字雪竇の腕力ぢや。何を教へたのだ。教へる事があるのか。この好肉に剗創ののではないか。なぜ山を下つた。この大馬鹿ものめがと。愚弄する氣味がある。禪の極意はこの一偈にあるのぢや。擔雪共埋井。これほど馬鹿氣た事はあるまい。名古屋ではこれに因で會の名を擔雪會となづけた。謠

ひの二代觀世を黒雪というたから、先年死んだ清廉に擔雪といふ居士號を與へた。別峯相見はいよく脱けきつた最後の一決であつた。しかし五十二人が役にたゝぬのではない。最後の一決であつた。その多くの師家のお蔭ぢや。始めは増上慢を起してこれでよいと腰を据ゑるもの。それを梔ぎとつて更に百尺竿頭一步を進める。もうこれならばと思ふ。又次の師家に奪却されて、まだいかなんだと氣がつく。これが千鍛萬練といふもの、難有いことぢや。しかし今はその師家がない。そこで虛堂は、病在一師一友之處というた。大慧は、大悟十八。小語不知數というた。衲は二十四人の師家に參じたが、羅山がとゞめをさした。羅山なかりせば、とても今日はない。色々印可をくれた師家もあつたが、的々相承したのは羅山一人であつた。善財も徳雲なかりせば、千仞の功を一簣に失するのであつたら

う。何處までも撥草瞻風して正師を求めねばならぬ。正師にあつたら何處までも其蘊底をつくさねばならぬ。

七十九、閑古錐の事

閑古錐はつかひ古びた錐で、閑はひまになつて用ゐられぬやくにたゝぬこととて、馬鹿の異名ぢやが、この閑古錐。容易の看をなすまいぞ。ひかし雪峰にある僧が如何是佛と問うたら、秦時、轆轤鑽とこたへた。阿房宮を造る時、用ひたやつめ錐といふ事ぢや。閑古錐の出故はこゝぢや。

白隱はこの閑古錐の頌を、五位の圓收。兼中到の位に別語した。吾門の秘訣はこの一頌にあり。更參三十年。馬鹿になれといふことは、どの宗旨でも學派でもいふ。孔子教でも、回也如愚といひ、良賈深藏如空。

君子盛徳容貌如愚ともあり。浄土門でも還愚といひ、黒住教でも馬鹿になれといふ。馬鹿といふ名は同じぢやが馬鹿さ加減が違ふ。味噌も糞も一つにしてはならぬぞ。

八十、老古錐。七蒲下

因にいふ。禪家で手紙の宛名の脇書に、老古錐とかく。尊敬せる意味ぢや。又七蒲下とかくは、長慶が二十年間坐禪して、七枚の蒲團を坐破したといふ處から出た語で、骨折てをらるゝの意味で、同輩又は師家から、學人へやる手紙にかく。禪學者の文字には油斷がならぬ。一々爲人ぢや。禪寺の入口に照願脚下は、足下に氣を付ろといふ意味。圓悟の故事から出た。五祖が火を吹き消して三佛をして各一句をいはしめた。佛果圓悟が、照願脚下というた事があつた。履物は必ず向うへ

向けて上がるもの。人の手を煩はさぬためとかへる時はくに便宜あり。もしも鼻緒がきれて居たら誰のでもよい。たてゝおく。古人には何時も竹の皮をもつてあるいた人がある。雪隠は雪寶が隠山寺で毎朝人の知らぬうちに糞の掃除をして、隱徳をつまれたより出た名ぢや。一々涙の種ならぬはない。

八十一、小兒になれ

小兒が小兒になるのなら別にいふことはないが、大人が小兒のやうになるのだから難題ぢや。小兒はいかにも憎氣のなきものぢや。分別のなきものぢや。泣くかと思へば忽ち笑ふ。笑ふかと思へば忽ち怒る。境に應じてあとをとめぬ。執著がない。年に對して小兒といふ。賢に對して愚といふ。比較物が違ふから名が違ふけれども、二

念をとめぬところは同じことぢや。五位の出處は涅槃經の嬰兒行ぢや。洞山はこれを事實の上にもつて来て死せる經文を生かした。寶鏡三昧に如世嬰兒五相完具不去不來不起不住。婆々和々。有句無句終不得物。語未正故とは五位をいふ前提ぢや。曹洞の宗旨は馳書不到家で、きまつたことがない。すなはち嬰兒行のところぢや。きまつて仕舞ばそれきりぢや。きまりがつかねば何にでもなる。何處へてもゆかるゝ。受取らぬ内がたのしみぢや。よし受取ても受取たと思はぬ。思はぬから用事が運ぶ。これを家に到らぬといふぢや。到るは、とゞまる意味がある。到らぬは足をとめぬ所ぢや。物の性質は始終變化極りなきもので活動三昧のものぢや。たゞ人が隔歴をする。其處へ腰を据ゑる。相手が此方へ入つて來る。それが障はる。自由を妨げる。愛憎が起る。煩悶が起る。其處になると小兒は偉いよ。

何事も念ひを止めぬ。跡をはらひ、跡を滅して止まる所がない。物に應じて轉轉々々。大自在のものぢや。且らく分ていへば馬鹿になれとは、自受用三昧ぢや。小兒になれとは、他受用三昧ぢや。自他元來不二なれば、小兒も馬鹿もつまりおなじこと。人に對して小兒の境界になれば、人が腹も立てぬ。恨みも出けぬ。泥棒が母の熟寢した側に赤子が目を覺し。泥棒ともなんとも思はず笑ひをふくんで這つて來て抱かれる。その無心三昧に泥棒が我れを忘れた。その中に母が目をさまし泥棒と知れど泥棒が泥棒を忘れてわが兒を餘念なく愛するものから母もまた我れを忘れて共に子を愛して御馳走して歸したといふ話がある。洋人の諺に小兒は大人の師といふのがある。禪者の行履は、小兒を學ぶのぢや。否自然と小兒のやうになつてくる。これが修行の結果ぢや。公案の極もこゝにあるぢや。只管打坐もこゝ

に在るぢや。五位といふも其模様を説明したのよ。その説明が又其道に入る手段にもなる。これが五位の修行ぢや。始めより小兒にならうと思つて修行するのではないぞ。つまり修行の結果として小兒のやうになるのぢや。求むれば知んぬ君が得べからざるをぢや。詩でも不用意の詩がよい。天真爛漫ぢや。只管打坐の只管の二字が不用意ぢや。只管の二字は參究せねば分らぬ。お月さまいくつ十三七つは何麼。こどもになれくく。

八十二 上大人丘乙巳

これは支那のいろはぢや。はじめて字を習ふ人の習ふ字ぢや。互ひに其時節があつた。竹馬の友は忘れられぬ。互ひに無心で隔てがないからだ。いろは時代の人になればよい。禪ではこの境界を結果

としてをる。目的とするのではない。目的は豫期作用ぢや。結果は自然ぢや。法華經に、不求而至るといふのがこゝぢや。この語は室内で必要ぢやから、よく調べておくがよい。乾峯三種病もこれが手に入れば全快ぢや。

上大人丘乙巳。化三千七十士。備小生八九子。可知仁。可知禮也。

日本のいろはに意味深長あるごとく、これにも意味がある。その意味は禪には入用がないが、知つて置いてもよい。

上大人とは偉らい人の事。大人君子をさす。丘は孔子。乙は一人の略字。巳はのみ。孔子の弟子三千で、六藝に通ずる者が七十人。其中十哲があつた。八九子は十哲となれとの意味。それには、禮と仁とを知らねばならぬ。仁は愛なり、菩提心なり。禮は敬なり、節なり。即ち坐禪にあたる。この一絡索、正に人生の歸極を示せり。諸禪録にしば

くこの語が出てゐる。知る人がしるぢや。

八十三、南天下の圓相

衲が曾て行脚の途中曹洞坊主に出會つた。中々歴々ぢやつた。いきなり網代笠を脱いで衲の前になげつけ。借問す圓中に坐すか。圓外に坐すかと。衲はいきなり其笠の上にとつかと坐斷して、我は圓中に坐すというてやつた。かれ彷彿爲す處を知らざりき。又一圓相を畫き三世の諸佛歴代の祖師も、この圓相を出づる事が出来ぬが、即今汝はどうぬけるぞ。速道速道と。虛堂は一抹して去れというたが、南天下は中々そんな事ではだめぢや。管嶺奴がこの手で衲を出し抜くつもりぢやつた。おつと其手は桑名の焼きはまぐりとどえらい處へ逃げてやつたらわれ五十六年今日の如き痛快に遭遇せしことなしと拜謝

したことがあつた。僞仰宗では九十六の圓相がある。外道の數に比したものだ。一々打破して海安海清なるべしぢや。これ又南天下ならではしる人がない。衲は圓相の畫賛に十三九ツとかく。時として餅か團子か桶の輪かともかく。小兒となるとこれが分る。小兒ほど力の強きものはない。諺に泣く兒と地頭にかたれぬといふにあらずや。これ又禪の意を寓せり。知るものが知る。知らずんば乞ふ。小兒に向つて問へ。

八十四、碧巖八十則

短い則ぢやから出す。小供のことがはつきりする。僧問、趙州、初生孩子、還具六識也無。初生孩子といへば、うまれ立ちの子ぢやが、二三才までの子供と見てもよい。泣きもする。笑ひもする。

氣に入らねば腹も立てる。しかし御當人は一向分別がない。泣いて泣くとも思はぬ。笑つて笑うたとも思はぬ。これで意識といふものがあるのであるか。どうぢや。無いといへば矢張り働いてをる。ありといへば木石に似たり。これは小兒に假托して無意識がこれ道なるかと問うたのだ。無意識がよく取違ひらる。寒岩枯木のやうに心得るものが多い。この僧もこの邪見解に陥つてゐる。無意識といふは自己を忘れて意識ばかりが天地一枚に活動してゐることをさすのぢや。眼眼を見ず。意識意識を知らず。金不博金ぢや。意識の孤犖々たり露堂々たる所が無意識ぢや。なにも妨ぐるものがないから無意識の場合は轉處自在である。そこで臨濟は有意自救不了というた。妨げるものがない場合の意識。こゝでは意識といふたら語弊がありとすれば、大圓鏡智と名けてもよい。無意無心を取違へるとと

んだことになるぞ。道元和尚曰言語道斷とは一切の言語を云ふ。心行處滅とは一切の心行をいふと。其間自己といふものがない。自己といふ副へものなき場合を無意識というたまでぢや。趙州云。急水上打毬子。急な流れの上で毬をつくやうなもの。油断をすると落ちる。落ちれば流れてしまふ。打する當人は唯毬になつてをる。外に念があると落ちる。餘念を入るを許さぬ。毬が許さぬ。毬になつてをる。さア云うてみよ。この間意識はどうなつてをる。其人に問うて見よ。さり乍ら毬一つでは毬が動かぬ。やはり人が毬をついてゐる。意識が一バイに働いてをる。人其物は人を忘れてをる。人間萬事皆こゝぢや。かうして世の中の仕事を仕たいものだ。煩悶の入る隙間がない。煩悶すれば落ちねばならぬ。輕業の綱わたりも同じことよ。無意識を取違へるな。さてこの坊主こゝで禮拜せねばなら

ぬが、一隻眼がないから、萬里區々として獨往還で、またぞろ投子和尙の處へ行く。僧復問投子。急水上打毬子。意旨如何。子云。念々不停流。知音同士はいつも符節を合するが如しぢや。趙州と少しもちがはぬ。念々停まる所なきこと、水の流れてやまざるが如し。流るゝ水は腐らぬ。つまり趙州を注釋したのだ。かうまで口へふくましても、分らぬ時は分らぬものと見え、この僧に歡喜の模様が見えぬ。さア即今汝等の意識は何處にある。めしをくふ。話をする。行く。坐す。寢る。起さるの即今。何物がある。これ念々不停流か。急水上打毬子か。こゝに至りては、趙州も笠上笠ぢや。投子も、好肉剗創ぢや。何の小兒とか云はん。大人とか云はん。

八十五、小供に就て禪家者流の誤謬

圓悟の碧巖評に、學道之人、要復如嬰孩。榮辱功名。逆情順境。都動他不得。眼見色與盲等。耳聞聲與聾等。痴似凡。其心不動如須彌山。這箇是衲僧家眞實得力處。他を動かすを不得の他は小兒をさす。何もゆきゝの人が深山木には見えぬ。小兒になると深山木とも思はぬ。大燈は坐禪せば四條五條の橋の上ゆきゝの人を深山木にしてといつた。天桂は其まゝに見よ。又悟由は深山木に見なというた。これは理窟に馳せて境界に重きをおかぬ。大燈は流石境界邊を練るを主眼としてをる。深山木に見る小兒の境界は中々容易ではないぞ。しかし小兒のことは兎角誤解をまねく。圓悟は真切に之れを説いた。次の文句を讀むと分る。

石室善道和尚云。汝不見。小兒出胎時。何曾道我會看教。當恁麼時。亦不知有佛性義。無佛性義。及至長大。便學種種。知解。出來便道。我

能我解。不知是客塵煩惱。例の心學者がいふ。うまれ子が次第次第に智慧づきて、聖に遠くなるぞ悲しき、といふやつぢや。客塵は外から入つて来た塵で、邪魔物だ。自己の胸中から自由に出たやつと違ふ。そこで小兒の天真爛熳がよいが、まるごと小兒になつたら、なんの活動も出来ぬ。小兒の心の内とるべき點をとるので、行爲を皆小兒のやうにせよといふのではない。こゝが取違ひのおこる處ぢや。小兒が小兒になるのと、大人が小兒になるとの區別はこゝにあるのだ。次の文でそれが分る。あまり諄いやうぢやが是非これは斷つておかねばならぬ。

十六觀行中。嬰兒行爲最。多々和々時。喻學道之人。離分別取捨心。故讚嘆嬰兒行況。喻取之。若謂嬰兒是道。今時人錯會と。分別取捨の念がない、相手を見ないところを學ぶので、それと、不動如須彌山所が入用なので、喩といふ一字をよくく工夫すべし。大休歇の人が分別取捨を離れたる處が小兒の「たゝわわ」の時に似たるなり。萬事すべて小兒のやうで實際分別取捨なくんば、忽ち破戒無慚の者となり、火を踏み水に溺るゝに至らん。あに如是のことありて可ならんや。深思之。深思之。

八十六、千年以前小兒の詩

何時もかはらぬは小兒の心。何時も愛らしきは小兒の心。心單なればなり。單は即禪心である。衲も若い時はちよいく道樂に古詩を讀んだことがある。今に忘れぬのは、南宋の范石湖の詩ぢや。
 芒針香輦漸蓬茸。春のものなかつばながふつくりと、野原に生ひたつて来た。お互におぼえがある。穂が出ると食へぬ。ふつくりとふくれ

た計りのやつは、輒かて食へる。少し甘みがあつてよいものぢや。支那も日本も、今も昔も小兒の情は同じ者ぢや。

蓬蒿甘酸半染紅。その上覆盆子もそろ／＼出来たがまだ酸ばい。よく熟せぬから、少しあからむと早くから取りたがる。我等もあとのことを考へずに、無茶苦茶に取つたものだ。

採々歸來兒女笑。欲の強いこと、つぼなや、いちごをおもふまゝに摘みとりて、手柄顔してよろこんでゐる。その姿の無邪氣なることよ。大人が百萬の金を得たよりも嬉しいことぢや。西行が金の猫をくれ、ば小兒はそれを龜の子と代へる。不顧前不慮後。その場その場で解脱する形ぢや。げに子供大明神。子供大菩薩ぢや。杖頭高懸小筠籠。小き竹籠に一ぱい取て、それを竹の先さへく／＼り付け、悦び勇んで歸る處の模様ぢや。何んにもない處彌陀も手をうつて

迎へ閻魔も笑を含んで一つ呉れよと擲擲するならん。浦山しき境界ではないか。禪ではこれが入用だ。

この詩を幾回も詠じて、小供心に同化するがよい。

八十七 衲は備前の岡山そだち

儀山は隱山家の歴々で明治の初年までゐた人ぢや。備前の曹源寺にゐて、洪川などもついたことがある。號を凡鳥といひ。棲梧軒というた。凡鳥は鳳凰で、桐に棲む鳥ぢやから軒號が出た。期する處の大なる知るべきなり。しかし凡鳥は平凡ぢや。又是不風流處也風流か。おれもとき／＼參じた事があつた。機鋒が中々鋭かつた。或時途上曹洞宗の雲水に出會した。この時はまだ古風が残つて途中で出會ひがしらの挨拶にも、大法の外はなかつたは慕はしい。その坊主が儀

山に向つて、如何是佛法的々大意とぶつかつた。儀山は只わたしや備前の岡山そだち、米のなる木はまだしらぬというて、さつさと行つたには、その僧哑然たるのみなりき。これは小兒の境界ぢや。又これを眞の大人の相ともいふぢや。眞の大人は即ち小兒の心である。

八十八、桃栗三年柿八年

修行は急てはいけぬ。急て負けたが大坂陣ぢや。如實にやつて行けば何時か悟れる。悟らずとも修行其物が尊い。修行の眞實は菩提心にある。菩提心は上求菩提下化衆生の願力ぢや。迷悟の上に超出してをる。菩提心の下に修して行けば（參師問法坐禪工夫）何時かむかうから悟らする。此方から焦燥るには及ばぬ。焦燥れば逃げる。道元曰。運自己證萬法迷也。萬法來證自己悟也と。只求むる所なく、得

るところなく、修しもて行くときは、花咲き實を結ぶ時節は必ず到るものなり。何となれば菩提心の種子はすでに蒔かれつゝあればなり。修行は即ち培養なればなり。華嚴經には、欲識佛性義。當可觀時節因緣。時節既到佛性自現前とある。鳥が卵をかやすやうに、日々夜々念頭を放さず、やつて行けば、別にかやさうとおもはなくとも、二十一日経てば、啐喙同時の時節が来る。疑ふことは出来ぬ。長短は人の因緣に因る。宿世の薰習力ぢや。しかし勇猛衆生成佛在一念といふから、慕直進前して躊躇せぬがよい。今時の悟りは、時節の來ぬのに師家の方から許す。教へて遣るのぢや。獨立自尊ではない。依他隨他ぢや。蟬が未だ時が來ぬのに、羽を削いて遣ると死んでしまふ。宋人の苗を抜くやうなものぢや。どうして堅固なものを作ることが出来やうか。生蠶にまゆを求め、犢牛に兒を産ましむるやうなものぢや。正受老人

いはく、近來禪苑に二三年も居ると大抵は無字を透らぬはない。さうしておれは透つた。師家が可いというたとして、ひとにほこるが、點檢しきたれば、只是生死大兆而栽培己見增長我見。奈何祖庭猶隔天涯と。いまは一夏位で透るやつがあるとき。實に困つたものだ。南天下はさうはいかぬ。打て打て打ちまくつた上でなければなかく許す者でない。あまり難いから皆逃げてゆく。居士の方は中々偉らい。いくら打たれてもそれを喜んで来る。願心が違ふからだ。菩提心があるからだ。悟りを急ぐ者もない。佛法は即今々々で切り脱けて行くばかり。菩提心さへあれば、左之右之皆修行ならぬはない。それで勇猛に修して行く。その代り時節さへ來れば痛快に打ち開く。一見して再見せずぢや。桃栗は何うしても三年ぢや。柿は八年ぢや。それ丈けのものぢや。伸すことも縮めることも出來ぬぢや。只遣れば

可いのよ。其内にきつと身心脱落の好時節が来る。

八十九、おれは十九

納は十九で悟つた。南泉も趙州も十八。鄭娘は十二才にして久學能、又叢林の拔萃とは驚かざるを得ぬ。靈雲は三十年にして桃花を見て悟り。香嚴は二十年にして竹を聞いて悟る。長慶も二十年簾を巻いて天下を看破した。勇猛に遣つても時節が來ねば駄目よ。しかし勇猛に遣らねばとても悟れる時節は無い。修行は怠慢と相應せぬ者ぢや。澤水法語にも、懈怠衆生涅槃亘三祇とあるぢや。年の長短をいふと、年をとつたものはやけを起す。その日を生れた日と見れば、おれよりわかいいものはない。過去は落謝し去て何にも無い。未來は未だ來らず、知るに由なし。今より外に物は無い。明日未來といふも、明日に行け

ばやはりその日の今日ぢや。昨日といひ明日といふも噂話しぢや。あれは必ず今日ぢや。今より外に物はない。そこで修行者たらんものは前もかへりみず後も思はず、一心不亂に動靜純一を守つて行くより外はない。それが一番近道で、しかも年をとらぬ妙法である。一心不亂の上に年齢はない。年の老功などを顧みるに違は無い。趙州は六十にして再行脚をしたではないか。而も八十の年まで遣つた。二十年間ぢや。それも十八年來悟つた上のことぢや。それから百二十まで生きて死ぬるまで化導した。今ぢや今ぢや。今より外に物はない。今を無駄にせぬのが世渡りの秘決ぢや。世の中は今より外はなかりけり、昨日もあすもうはさのみなり。

九十、南泉十八上

南泉云。我解作活計十八上とは、十八才のことぢや。作活計とは、萬機休罷して日用應縁の處、快活自由ならずといふことなき境界ぢや。われの一文字眼なり。われと云ひ出すからには、自信力の最も強い所を知るがよい。しかし作活計とて、天にも上らぬ。水をも踏まぬ。飢來喫飯、困來打眠するまでよ。それではあまり飽氣無い悟りぢやないか。さう思ふものは、ますます修さねばならぬ。古人崑崙に棗を呑むなと戒めた。丸呑は毒だ。

九十一、趙州十八上

趙州云。我十八上。解破家散宅。やはり我といふ字がある。南泉の子ぢやが、親まさりとの評判ぢや。雪竇はほれこんで、碧巖へ札を十二枚つけた。破家散宅とは、住所なきことぢや。衆流截斷して、あへて住ま

る處なき處ぢや。大自在の處やはり作活計としてもよい。古來優劣をつける人あれども、甲乙はない。このくらゐ悟つても、六十再行脚とは何處のことぢや。小成に安んぜられぬところぢや。趙州は口皮の禪とて、口の先で如何なる者でも扱うた。雪竇も孤危不立道方高といふてをる。棒喝の手段を用ゐなんだ。所謂刃に血ぬらずして勝つは戦ひの上乗なるものである。久響石橋到來只見略狗州云。汝只見略狗且不見石橋。僧曰。如何是石橋。州云。渡驢渡馬。誰にもよく分つて、ちやんと宗旨がとゝなうて居る。しかし眞の知音は稀ぢや。柏樹子の話は趙州から出た五家七宗の外の一流ぢや。得た人が少い。

九十二、趙州二十年何事をかなす

趙州道。我在南方二十年。除粥飯二時。是雜用心處。

この語古來難解なり。點の付け方にて違ふ。われ南方に在て佛法修行のために、朝參暮請して、霜辛雪苦したが、今になつておもへば、みな無駄のことぢや。粥飯の二時は無くて叶はぬ、是非入用ぢやが、其外は悉く益にたゝぬことぞ。何故なれば、元來一毫も佛法なしぢや。無いものを有るか、と模索しこそ、無駄に心を用ひしのみぞ。そこで趙州はつねに、有佛之處急走過。無佛之處莫留迹というた。しかし是に至つたはやはり二十年修行の功ぢやから、それを丸呑にしては駄目だぞ。教家でも、藕呑圓頓といふ語がある。まして期する處の大なる禪では修行を輕侮するやうなことがあつては駄目だ。うは滑りはすべてだめだ。徹するまで遣るがよい。

除粥飯二時、雜用心處と讀めば、粥飯の二時丈は心を用ひねば食へぬから、このときばかり雜用心ぢや。その外は修行三昧に入り内外打成

一片で實に餘念をまじへなかつた。その功によりいまは歸家穩坐する事を得た。二十年間を無駄骨に見ると有功に見るとの差はあるが、何方にしても二十年後の境界は同一轍ぢや。どちらから工夫してもよい。一は結果を前に見。一は結果を後に見る。一は正偏回互。一は功勳邊に約するぢや。宗旨の取扱方だけぢや。どちらにしても骨折らねば無益だ。白隠もそのまゝとりを痛く誡められた。立枯禪焦芽敗種の徒といはれた。いくら議論は高くても空腹高心では無益ぢや。五月の鯉の吹流し口先計りて腹がなくては役にたゝぬ。境界が其處に到らずして、其境界を氣取る。始めから初段の碁にはなれぬ。身をば碁石に磨り潰し、千鍛万練の功を積まねばすべては無益だ。生死岸頭に立て大自在を得ること思ひも寄らぬ。平生人の前では大口を吐いて濟みもしやうが、さあ眼光落地となると、限りのときにあら

はれにけりて、大狼狽大苦惱で輪回の種をまかねばならぬぞ。悟りといふものは、丁度百合の皮を剥くやうなもの。只管打坐や公案の工夫や正師の鉗錘は、一皮々と剥くやうなもの。むきむきして従前の悪知悪覺を蕩盡しつゝ行くと、たうとう仕舞に剥くものがない。そのとき、忽焉として自己を忘ずる境界に體達するのぢや。百合の皮に心は無い。何程剥いても何もない。剥かねば皮が残る。残しておいて何も無いとはいへぬ。そこで何うしても二三十年の間にその皮をむき断るのぢや。勇猛心で、早いも遅いもあるが、皆むかねば何れにしても駄目。イロ／＼の問題が起ると、皮が妨げて惑く。大苦惱を免かれぬ。破家散宅は、時節が純熟せねば得らるゝものでない。ぐつくと骨折るより外はない。古人の歌に、
百則を唯一足に飛ぶべえと足踏み折るな碧巖の前。

九十三、貧になれ

學無善於苦學。道無美於貧道ぢや。貧亡であるから贅澤は出来ぬ。何か求めやうとて、求むることが出来ぬ。所謂裸一貫雲助の境界ぢや。もう何處へも行きやうがないから、やはり其道に頭をつきこむより外に仕方がない。もし何かもつてをらねばそれに心を用ゆる。或はいろ／＼の贅澤や、求むる心が起つて、不知々々道に遠ざかる様になる。罪を造るもこれから起るぢや。道は無限の道である。贅澤心は有限で、苦に終るもの。そこで貧道ほど善きはなしといふのぢや。臨濟は、日消萬兩黄金というてをる。貧亡の境界ぢや。有限の財産を捨て、無限の法財を得よとなり。修行も此處が眼の着け處ぢや。貧の極に達すると何にも無い。自己といふものもない。無心尙滿萬

重關とあるから、無心といふも未だ貧亡の仲間にははいれぬ。石霜の七去といふ事がある。休去、歇去、冷湫々地去、一念萬年去。(無念の意寒灰枯木去、古廟香爐去、一條白練去、隨分貧亡をあつめたものだ。九峯なるものあり。一條白練去が分らぬとて懸賞問題とした。首座曰く、これ一色邊事を明かすといふた。一枚物ぢやと注脚を下した。九峯中々肯はぬ。石霜先師はそんな所に居りはせぬといふた。かれは香を焚て坐脱して七去の實驗を示した。死ぬほど貧亡の事はあるまい。しかるに九峯は屍を撫でて曰、坐脱立亡即不無先師意未夢見在といふた。貧亡の眞味が分らぬ故、あたら命を捨てた。分らぬほど氣の毒なものは無い。罽賓國の王は獅子尊者が蘊空を得たりといふを聞いて、つひに首を刎ねた。憎い事がとほりこして、その不明が氣の毒になる。死と云ふもすでに一物あり。まだ貧乏の中間

にはいれぬ。眞に貧乏の味を知らんとせば、只管打坐して身心脱落なるべしぢや。身心脱落は貧乏の極點ぢや。貧乏人は身につくものがないにない。乞食三日すりや忘れられぬ。何時も赤裸々ぢやから、おいて行くものがないから、死ぬるにも世話がない。ものは持てば持つ程執著が多い。學者は學問が多いほど煩悶が多い。如今抛擲西湖裏。下載清風付與誰といふ語がある。これも貧乏の境界ぢや。もちものを即今只今西の海にさらりと投てしまつた。そこで重荷が下りた。下載とは舟に積て来たものを皆陸揚したをさす。それから何も邪魔物が無い。かるく〜と追手に帆かけて走る心地好さ。この貧乏の味を誰にやらうか。やるものがない。稠載而往垂棗歸 往きしなには一ぱいつんで汗をかいて行つたが、歸りには何にもないふくろをたれて歸る。なんとかるく〜しいこと

ではないか。貧乏の形容ぢや。禪の修行はことども。ばか。びんぼうの三つぢやが、どれでも一つ出来れば互ひに通ずる。一度に三つはやらぬから、どれか一つが手に入れば餘の二は自在になる。詮じつめれば同じ物ぢや。去年貧有錐無地。今年貧無錐無地。こゝまで来れば大丈夫。佛光國師が乾坤無地卓孤筇といふたも、孤筇といふものがあるから、まだほんとの貧乏ではない。

九十四、大燈國師乞食中の詩

一飯千家飯。孤身幾度秋。冬暖草筵裏。夏涼橋下流。
 非空又非色。無喜又無憂。若人問此六。明月浮水中。
 大燈國師は、二十年間五條橋下で乞食した。貧乏の稽古をしたのだ。

この詩には孤身とあるが女房や子供もあつたといふがおそらくは構造説であらう。最も境界を鍛るためには人情の微細に亘らねばならぬから、あつたかも知れぬ。瓜の接待には子供が出かけたのぢやといふ説もある。聖胎長養は憎い可愛い微細の流注をとるのであるから實地に向て實驗せねばならぬ。妻子説もあながち非難すべきでない。只大法あるためのみぢや。この詩も大燈に假托して後人が作つたといふ説がある。それはどちらでもよい。大燈としても差支へはない。六とは前六句を指すといふ説もあるが大燈が乞食のときは名を六と呼んだともある。結句明月浮水中は力がある。竹影拂階塵不動。月穿潭底水無痕の模様ぢや。潭庵はこゝを水の面に夜なく月は通へども姿もとめず影ものこさずとやつた。坐水月道場。修空華萬行。

九十五、雪竇大師遺偈

雪竇は重顯と諱す。蓋し雲門の讖豫言に。二百年後吾道重顯とありしに應ぜるなり。七日前死のいたるを知り壽塔の掃除を命ず。大衆皆號泣す。辭世の偈を乞ふ。師曰吾平生患語之多矣と。一生涯あまり喋舌り過ぎた。今又何をか云はんの意ぢや。衲も思へばこの通りぢや。南天棒は説かぬ方の名物男ぢやが、それでも云ひ過ぎる。守口如瓶でなければならぬ。口邊生白醜。うつかり云ふと人を損ずる。弘法大師曰。説默待時待人。蓋し可言不言。不言不言。不言言之失。智人斷而已。言はねばならぬことを言ふはよい。又言ふまじき事を言はぬはよいが多きは言ふまじき事をいふ。これ實に失なり。智者判斷したまへとの意なり。其の通りよ。

九十六、比丘の本義

坊主の事ぢや。實は二百五十戒を全うした者でなければいへぬ。今のは比丘ではない。釋迦は袈裟を着たる獵師というてをる。殺盜淫をやるから尤もぢや。しかし遺教經に。汝等比丘と宣ふたのは頭を剃つた坊主すべてをさへれた。勿體ない事ぢや。比丘。比丘尼。優婆塞。優婆夷と順序する佛制なり。衣を着たものは兔に角上座に据ゑねばならぬ。優婆塞は善男清男又行者とも譯す。有髮の信者をさす。上にすわるはよいが、その比丘どのが髮をのべ帽子をかぶり、これによると洋服も着る。勿論妻子あり。佛殿裏に襦袢が干してある。販賣貿易もする。動物を畜養する。賣トもやる。蠶を養ふ。牛を飼ふ。甚しきは牛を屠ふる。料理屋もする。土地を買うて金儲けをす

る。人も殺す。寺も賣る。そしてみだりに人の信施はうける。説法はつねにせず。何處をとつて比丘といふぞ。比丘は梵語で、多含の故に譯せずぢや。乞食が本義ぢや。托鉢して生活する。それも親指を垂てとくところまで貰ふ。鐵鉢をはつたらといふ。こゝに應量器といふもこゝらから出た。過分を貰はぬの意ぢや。怖魔と破煩惱との意も含んでゐる。この事は前の中峰和尚座右銘の所で云つて置いた。比丘は貧乏の極で何にもないのが本來ぢや。そこで乞食ぢや。比丘そのまゝが大悟の當體、その物になるのが一番成佛の近道ぢや。が、さて今のはとんだ乞食殿ぢや。金もためる。金貸もする。ときとして高利貸をやる。荷物はますます多くなる。煩悶は益しげくなる。佛天の冥罰も恐れねばなるまい。百三十六は何の文字ぞ。云うて御覽。福澤は偉らいやつ。僧は俗より出で、俗よりも俗なりとい

うた。猛省一番して可なり。唯比丘は比丘になれ。そのまゝ成佛の端的なりと知れ。不見言不離當處常湛然。

九十七、道得南天棒道不得南天棒

これは衲が宗旨ぢや。昔俱胝は只堅一指た。ひま岩は木杖を以て度した。徳山は三十棒。臨濟は喝。各宗匠獨特の伎倆を以て度生の材料とした。しかし一つ透れば千處萬處一時に透るから衲のこの一則さへ透れば天下無敵だがなか／＼この棒をくらはす根機の者が無いから不得止公案禪をかりて根機を製造せねばならぬ。打つのはまだ程遠いことぢや。

おれは何といつても打叩く。たとへ答へ得て甚だ諦當なりといへども打つ事は必ず打つ。印可をうけたやつでも師家分上のもので打

つ。何を打つか打つ丈けの知見解會があるからだ。所謂露がたるからだ。金があるから使ふ。つかふから病氣にかゝる。金を握ぎ取つて仕舞へばいやとも家業を精出す。真人間になる。おれの棒は學文を打ち砕く。佛見法見を打ち砕く。權勢も富貴も階級も何も皆打つ叩く。そして禪見といふ根本無明を打つ叩く。そして何にも無いものにしやうといふのが捧の神聖ぢや。ある人がこの頃は南天棒が老いたと見えてぶんなぐる事の少いといふ。いや衲はすでに棒を八幡へ納めた如く實に打つ漢が無いからだ。打つてもらいたければ何時でも出て來い。老いたりといへども南天棒の腕には骨があるぞ。しかし打つといへば逃げる影辨慶では駄目だ。爲法には失命を避けずやつて來い。

九十八、徳山の棒

あれは徳山が好き。徳山はやはり道得三十棒。道不得三十棒をやつた。あれのを徳山の真似をやるやうに思つてをるが、さうでない。棒喝は禪家尋常の茶飯ぢや。古例を仰ぐの要あらんや。自然と徳山底と暗合したまでぢや。強ひて云へば、衲が千年前に徳山となつて棒を使ふて居つたといふてもよい。徳山が千年後に南天となつて棒を行じたといふてもよい。さうなると二つない。前後を論ずることもいらぬ。兎に解知音同士には違ひない。衲はかれの棒よりか龍潭までの道行が好きぢや。かれは金剛經の破相大乘が得意で、十八年間に大部の註釋を書いた位ぢや。時に南方に即心即佛の宗旨がはやると聞き、これは魔黨である。聲聞緣覺になるも、三生六十劫かゝるとい

ふに此の世ですぐに佛になれるとはけしからぬと、大いに憤を發して、打破してくれんとて出發した。この志はよい、猛利の漢ぢやが、如何せん誇大妄想なるを。途中餅屋の婆々に遭ふて餅を買はんとして、反つて一問を蒙る。金剛經に過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得とあるが、今この餅をどの心で食ふのぢや。云へば賣らん。云はずんばうらじと。さすが執金剛いきづまつた。他の寶を數へて半錢の分なして、金剛經が我物になつてをらぬ。我慢はない。屈すべきに屈するから伸ぶべきに伸ぶぢや。婆々に教へられて直に龍潭に行つた。満身菩提心ぢや。時を空らせぬ處が妙ぢや。直に一問を發した。久響龍潭。來て見れば龍も見えず、潭も見えぬはどうぢや。龍潭首を伸て、汝親く龍潭に到れり、只見ざるのみと。一本やられた。夜入室す。深夜に及んだが歸らぬから、もう歸れ。はてしはなきぞと紙燭を點けて渡

す。徳山取らんとする一刹那龍潭ふつと吹消した。何事も勦絶した。徳山この一刹那に自己を忘れて、金剛經が何處へか行つてしまつた。即心即佛の客氣もなくなつた。重荷が下りた。嬉しかつたらう。衲も奥山でやつた時この事があつた。同床に臥せずんば争か被底の穿つを知んぢや。徳山は書餅不足療飢というて、十八年かゝつた金剛經の疏を焚いてしまつた。これからは煮ても焼いても食へぬ男になつた。龍潭は、牙如劍樹、口似血盆と讚めた。因に徳山には二人あり。初代は馬祖法嗣、三角總印禪師で、蹉過了也の一枚物であつた人。今は第二代なりと知るべし。

九十九、瑞巖入寺の偈

南天、棒即徳山禪。得々挈來失其傳。看盡神仙松島景。瑞巖高處打安

眠。瑞巖寺は風景には富んでゐるが、禪縁の無い土地ぢや。おれはこゝに十年ゐたが、宗般高隱、隱の三人を拵らへたに過ぎなんだ。しかし彼等は何處に居ても來る漢ぢやから、ことさらに瑞巖寺の必要は無い。失其傳の三字。知る者が知るよ。

百、宗匠檢定法(再び)

これは前にも話した様ぢやが、大事の宗匠檢定法ぢや。今一度話さう。是を初めて妙心本山に持出したは、衲が五十五年の年で、明治二十六年瑞巖在住中のことであつた。抑此事たる、我自隱和尚以來年を経るに従ひ、師學共に名利に走り、眞風地に落ち、祖庭の荒涼見るに忍びざる所より出で來つた、血滴々地の問題で、丁度この時はまだ師家と稱する者が

十八人はあつた。それを一々本山に呼び寄せ、衲が其衝に中り、憎まれ役に立て、この檢定法通りに一々點檢し、もし躊躇して答話に誦當を缺くやつがあつたら、直に喚鐘をとりあげ、宗匠の名位を褫奪し、天下の道場たる僧堂を追ひ出し、墨染の衣と鐵鉢とを渡し、再行脚を命ずるといふ手段であつた。實にこれ禪界の一大革命で、これにより懸絲の佛法を繼ぎとめやうといふのだから、衲は身命を抛つて人の惡しみの集中點となつた。

如此重大の性質を帯びた檢定法であるから、この法にはあらゆる古今の大難則をあつめて、點檢の法財となした。これ衲が三十年來全國二十四の宗匠を推敲せし所以である。この二十四は其當時の龍象で、にせ者は少なかつた。しかし有長有短有能有不能で、一々然諾の出來ぬのもあつた。就中潭海。無學。伽山。滴水。匡道。鈞叟。の諸

師は、大いに此舉を翼賛し、本山建議の際には共に連判をしてくれた。嗚呼。人定つて天に勝ち、衆口金を鏢らかす。天道抑も是か非か。評議の根本智たる議員。皆名利不正の徒。投票政策の神聖何によりてか保たん。否是投票の通弊なり。甲論乙駁の結果この神聖不可犯檢定法は、これら多頭の手にて握り潰されにき。佛祖は尙われを艱難に試み玉はんとの大御心にや。はた諸天善神の世と共に怠慢を生ぜしものか。ともかく魔黨萬歳ぢや。大燈曰く、波旬舞袖長しとこれなり。しかしこれはおれが人も正直な者ぢやと思つて、法律的にやらうとしたのが失策ぢやつた。本山は魔窟なることを知らなんだからぢやつた。道は寺によりてのみ行はるゝ者でない。神力品に出でをるやうに、山谷曠野どこにてもなすによい。たとへ本山で行はれなんだとて雪中の松柏はいよゝ青々で、衲の志操が一難をふるごとに強固と

なつた。民間地方的にますくこの法を鼓吹した。とても腐敗せる現宗師はたのむにたらぬ。新に人を作るの急務を感じたから幸ひに寺務多き瑞巖を去ることとなつたから専らこの事に念ひを集注することとなつた。先づ涙ある坊主を三萬の禪坊主から募つたが人物はないものだ。この未曾有の妙法に投じたものは僅かに高隱。宗般。默雷。の三名のみなりき。慨嘆餘りあれどもこれが末法の真相ぞと思ひ取り坊主から人をつくりといふことを思ひ切つて、おれは其頃から専ら居士連から傳法の菩薩を作る方針を取つた。これ佛が末世佛法附屬大心凡夫と宣うた記薊に應ぜんがためである。白隱を生んだ正受老人も實は居士ぢや。佛が維摩經を説いたもこの意味を寓せられた。もとより法は一切衆生の共有物で法の上に僧俗はない。悉有佛性の金口あり。取るものが取るまでぢや。誰がとる。菩提心あ

る者がとるまでぢや。今日衲の居士大師は三千人ある。各地に分散して各自から我法を鼓吹しつゝあり。居士は他の信施によらぬ者生活に時を費さねばならぬ。無論専門は坊主と違ふが坊主共が皆魔化作沙門ぢやもの居士によるのやむをえざるを知るがよい。咄。南天男兒終不屈。皇天皇土眼分明。

百一、宗匠檢定法の内容

宗匠檢定法の内容は粹に粹をぬいて古今の難關を集めた。これが皆手に入れば宗通。説通。大自在ぢや。門外の人には語路の分りにくい氣味もあるだらうが大日本同胞いな行末は世界のはしばしまでもみな南天下に歸せねばならぬのだからどうか勉強して讀んでくれえよ。

この檢定法を見て禪を學文のやうに誤解する人もあるであらうが、さうでない。宗通は且くおく。説通に至ては微細に微細を盡さぬと、好人物を作り出すことが出来ぬ。白隠も乳房細くちやよい子が出来ぬといふたではないか。其上今日の修行は昔のやうに如實でないから、只管打坐を固守するやうな根柢はない。大抵は學文やら禪やら分らぬ公案を、虎の子のやうに思つて遣つてをる。それは皆死見解、精妄想で、みな生死の大兆といふ者ぢや。今では公案の數の多い叢林が盛んで、つまり妄想を多く擔つてをるやつが勝を占むる。これが所謂勝他禪ぢや。まづこれを滅盡せねば、とても眞の禪を弘めるわけにゆかぬ。即ち檢定法は、一々これを塵殺する利劍である。兵法の所謂敵に糧によるで、彼れの道具を捕へて彼を殺すの手段で、法眼宗の所謂巡人犯夜である。其味ひはやはり室内で中つて見なければ分らぬ。學

文をやぶるの法と、學文を擔ふの法と、天地遙かに隔たることが知れる時が来るであらう。まづ其内容の題目だけ擧て、南天下の檢定法が、いかに粹を網羅し盡したかを知るがよい。

第一無字四十五則。第二隻手四十八則。法身機關言詮三百則。法窟爪牙百則。葛藤集二百七十二則。臨濟錄三十則。槐安國語二十七則。碧巖百則。無門關四十八則。虛堂代別百則。八難透。首山綱宗偈。汾陽十智同心。白雲端三頓棒頌。碧前無邊風月頌。碧後萬斛盈舟頌。十重禁。達磨無相心地戒體。百八字頌。提綱一々。五位提綱一々。拶所無限。末後牢關。最後一決。以上一々點檢する。これを三十年の修行と申してをる。しかし初めの無字が痛快に打ち開ければ、法は舉體融通の者であるから、一瀉千里に透過せらるゝ。古人も、一疑破れば千疑萬疑一時破といつてをる。

一處透れば、千處萬處一時透ると云ふも此處ぢや。この澤山の則が、一時に瓦解氷消するとは、何と愉快のことではないか。五祖曰、會則事同一家、不_レ會萬別千差と。南天下は初めのかはきりが大難關ぢや。大抵逃げて終を全ふするやつがない。今は一々内容の一斑を説明して、修行に好便宜を興へん。若し其れ眞實に至つては、各自自修して、冷暖自知するより外はない。公案の工夫に文字や出故の分らぬため、つまらない時間を費すことがある。これはお互に修行中の經驗である。いうても可いことだけは可成いうて置きたい。ことによると今の禪は、いうて可いことに骨を折らんで、室内でむちやに秘重し、肝心の一大事は何時まで行つても、埒明かぬのではないか。自ら道を知らずして人を導かんとするは、理に於て出来ぬことぢや。一々點檢して、宗師の正邪を檢出することは、今日禪界の一大急務である。不見言。格龍

蛇眼正。擒虎兇機全と。いでやこれより檢定法内容の一斑を説示せん。看ヨヤ。看ヨヤ。

百二、無字付道元禪師の無字觀

第一無字の公案。無門關第一則に委し。僧趙州問。狗子還有佛性也無。州云無と。この僧も賊機がある。趙州の答へ様に依ては、一掌を與へ兼まじきなかくへぬ坊主だ。何故なれば一切衆生悉有佛性は佛家の通則ぢやのに、狗子に還つて佛性があるかと問ふたは、すでに自語相違の過がある。それを知りつゝ態とふつかけた。驗主問といふのぢや。趙州さすが戦になれた作家ぢや。そんなことは百も合點。鑑在機先ぢや。唯無と答へた。唯の一字をよく工夫するがよい。無といふは誰れもいふが、なにも副へものがない。意識分別がつい

て居らぬ。そこで唯ぢや。大慧も趙州の無字祇麼舉せよというた。
 祇麼は唯ぢや。この僧もはや二の句が出ぬ。唯無と提舉したものは手がつかぬ。そこを無門は莫作虚無會莫作有無會といふた。聲の會。文字の會。思慮の會をなす勿れとついでにいうておから。大燈は向無理會處究來究去といはれた。道元は於無字上擬量得麼雍滯得麼全無巴鼻というた。元來が擬量してあてつ比量べつせらるゝものでない。雍へることも滯りやうもない。虚空を抱いてないたものはあるまい。全く摘みやうもない。巴鼻は杷柄即ちとつての事ぢや。しかし無字を外の方と思ふまいぞ。即今この様ぢや。この方ぢや。自己ぢや。這箇ぢや。名は何んとでも勝手次第ぢや。
 道元和尚の次の文句がよい。
 請試撒手。且撒手看。追拂つた處ぢや。只管打坐の當體ぢや。且は

更に精彩をつけよとの意なり。御親切なお言葉ぢや。
 身心如何。すでに脱落し來れり。即今身心何處にありや。ありといへば逃げる。無いといへば無くなる。非有非無といへばお化になる。欲識庵中不死人豈離而今這皮袋。逢茶喫茶。遇飯喫飯。咳唾掉臂不假别人力。別人の二字字眼なり。參じて知れ。
 行李如何。行李は荷物のことであるが荷物があればそれを下ろす所がなければならぬ。そこで落付き所といふ事に轉用したのだ。必竟歸着する所はどうぢや。好雪片々不落別處ぢや。好雪片々の所に工夫を下せよ。眼見如盲。耳聞如聾と。龐老はいうた。川合又五郎落付くさは九州相良ぢやが無字はそんな遠い所ぢやないぞ。
 生死如何。道元禪師行届いた者だ。痒い所へ手がとゞく。無字の上は生死ありや。關山は惠玄の這裡に無生死というて生死を問ふた僧

をなぐりだした。老胡門下客。寧可入黃泉ぢや。この所を道元和尚の遺偈に活陷黃泉といはれた。

佛法如何。即今佛見法見ありや。そんなけちなものゝ寄り付かるゝ無字でない。今日即今でない。實際後際なし。豈に即今あらんや。只何となく働けばこれに上こす佛法は無い。其外別に佛法といふ者はないはずぢや。

世法如何。資生産業不違背正法。刀耕火種一々光明。奇也哉。奇也哉。

一切衆生具有如來知慧徳相ぢや。

山河大地人畜家屋畢竟如何。只與塵に見よ。何物かあらん。纔に如何と擬せば、山河我を襲はん。恐ろしや。恐ろしや。もし又思はねば有氣の死人と呵からるゝ。進んでも命とり、退いても命とり。身を捨てゝこそ浮む瀬ぞあり。命懸けて遣るまでよ。

看來看去。自然動靜二相了然不生。頂門の一隻眼即無字の眼を見る

のぢや。動靜純工其人如玉ぢや。無理會の人より解し。無舌人の人より説く。不生の二字字眼なり。無字の効果なり。大自在底なり。

此不生時不是頑然。頑然は不自在の義ぢや。不生なるが故に不滅ぢや。いつも活動して身心を其物としてをる。身心不生ぢや。不生身心

ぢや。生れたらそれ丈けのものに限らるゝ。生ぜずしてはたらくから何にでもなれる。地獄にあるかと思へば、人界にも。佛界にも。十

界は十如是ぢや。これが無字ぢや。豈に千七百とのみいはんや。無盡世界をのんで痕迹はない。椰標横擔不願人。直入千峰萬峰去。さあ

この次の句がまた難有い。無人證之迷之惟多。かういへばすぐ分るやうなものぢやが、眞にこ

れを實證することが六づかしい。父母所生身。全現法王身でなければ

ならぬ。法王身は即無字ぢや。別所に落ちるもので無い。臥輪有、技倆。能斷百思想。對境心不起。菩提日日長といふたら六祖が。慧能無技倆。不斷百思想。對境心數起。菩提恁麼長というた。上には上がある。斷つべきものがない。起るべき心がもと不生ぢや。むりに起らせぬと心を用ゆる必要がない。菩提に消長はない。恁麼は自在ぢや。如是ぢや。心がもと不生ぢやから、任運に起つて自在に長養さるゝ。一句子の違ひで千里萬里ぢや。山上尙山あるを知るがよい。胡椒丸呑に出來ぬ所ぢや。參禪人且半途始得。全途莫辭。祈禱祈禱。これは悟は十成を忌む、曹洞流の極意ぢや。虛堂は代別の終に他忌觸諱と別語した。虛堂は普說の中に、しばく曹洞の例を引いてをる。ありがたい宗旨ぢや。臨濟雲門百花春というたが、曹洞又あにこの中を洩れんや。雁ないて菊

の花さく秋はあれど、春の海邊に住吉の濱。又曰く、松島や始めて驚く八百州。誰知遠烟浪別有、好思量。右は道元和尙無字に對する評唱であるが、無門は更に工夫の方法をいふた。道元は只管打坐をすゝめて、他をいはぬ所は高尙ぢやか、末法人の劣機が取り付くしまがない。そこで不得止老婆を垂れておいて、鈍の方を嚴にするより外はない。これも時代思想ぢや。道元和尙の時、人質尙素朴の所があつた。末法は末法ぢやが、像法に近かつた。今は益々末法に入つて煩惱で焚き立てられてをる。人々思想が複雑であるから、單純の法では可かぬ。公案禪も自然の要求というてよ

百三、無門和尙無字工夫の方法

無門和尙無字工夫の方法

無門關に曰く、

莫有要透關底麼。將三百六十骨節。八万四千毫竅。通身起箇疑團。參箇無字。とある。この身體を頭の頂上から足の爪先まで、一微塵までのこらず、無字即疑團となして仕舞とある。體全體が無字なれば、一擧手一投足一言一動皆無字ならぬはない。分別も思慮も答念も無字其物も何も入る隙間はあるまい。生死如何。身心如何ぢや。これが臨済の全體作用といふものぢや。疑團を釋くのではない。疑團になるのぢや。怪不爲怪其怪自消ぢや。家無白澤之圖無如是之妖怪ぢや。古人は有白澤之圖といつたが、無の方がよい。工夫一番して看よ。疑團其者になれば、疑團は自から去る。もはや無の見といふものがない。心にかゝる浮雲がないから、もう大自在ぢや。何も邪魔物が無い。無字は清淨ぢや。無碍ぢや。無限ぢや。大自在ぢや。大歡喜ぢや。手

の舞ひ足の蹈むを知らぬぢや。

蕩盡從前惡知惡覺。久々純熟自然。内外打成一片。如啞子得夢。只許自知。父子不傳。否千聖不傳の妙法ぢや。そこで價値がある。人から得たものでない。自知底のものぢや。從門入者。非家珍。從自己胸襟蓋天蓋地。將來でない。と駄目ぢや。内外打成一片とは、動靜二相不生の所ぢや。有無の二見を離れ、身心脱落した所ぢや。なんぼ云ふてもなつて見ねば分らぬ。其効用を云ふて美しがらせるのだ。罪だがこれによりて希望熱、即ち願心さへ起れば、いひ甲斐がある。驀然打發驚天動地。驀然とは、思因地一下の場合ぢや。所知を忘じ自己を忘じた所だ。さあかうなればしめた者ぢや。乾坤に獨歩して天下に横行せん。何の妨ぐるものが無い。天地と自己と一體。萬物と我と同根となつたから、驚かすも動かすも、無字の働きに過ぎぬ。

恰も是れ、如奪得關將軍大刀入手。關羽の青龍刀であたるもの撫で斬り。魔外窺無門ぢや。逢佛殺佛逢祖殺祖。實に佛祖も足踏が出来ぬ。佛見も祖見も何にも無い。海晏清清天下太平ぢや。そこで於生死岸頭得大自在。向六道四生中遊戯三昧。なんと愉快ではないか。此生死が自在にあつかへる。六道四生中に入て化度する事が、小兒が餘念なく戯れ遊ぶやうなもので、なにも造作は無いぞ。つまりこの無字さへ透過すれば行くのよ。千年の暗室に一夜の燈ぢや。無始の無明が、無字一刹那の光明に照らされて十方三世残るくまなく見え透くのだ。なんと愉快のものではないか。

それ無字は如是然り。只この一則で始末がつく。終り初物ぢや。末後の一句ぢや。外に何の公案も入らぬわけぢや。要は大安心にあるぢや。しかるに今の無字はさうはいかぬ。これが師家が名利に走る

からだ。名利に走るものが眞の悟りが出来やう筈がない。名利と悟とは相應せぬものぢやからだ。

百四、貞女不見兩夫

貞女不見兩夫とは禪の極意である。無の時は無より外は無い。二人の夫はもたぬと同じことぢや。軍の時は軍より外は無い。農の時は農より外はない。そこで強兵ぢや。そこで富國ぢや。生の時は生の外はない。全機現といふものこれなり。死の時は死より外に物は無い。蓋天盖地である。そこで生死岸頭大自在ぢや。満身無なれば満身無の外に何んにも無い。云へばもう二心ぢや。思へばはや隔心ぢや。無と唱ふるもはや遅八刻ぢや。そこを至道無難禪師が無といふもあたら詞の障かな無とも思はぬ時は無となる。と歌はれた。いく

ら云ふても書餅ぢや。所詮は實修する。自知するより外はない。とにかく坐禪をすればついに好時節が来るに違ひは無いが、その根柢がなければ、日夜にこの無字を提撕して、間斷なく工夫して、滿身を無にし去つて看よ。不思拍手大笑せん。これは大慧の口調ぢや。

百五、當今の所謂無字の真相

今の無字は自知ではない。他知である。口授である。注入である。師家は可いと云ふたが、どうも衲は安心が出来ぬ。これが禪といふ者か知らと疑心を起す者ばかりだ。これ全く邪師の罪である。可憐の學人をして遂に救ふべからざる者としてしまった。そこで衲の檢定法には、其見地を打破して正道に入るやうにする仕懸がある。即四十五則の難關である。これを拶所と名くるぢや。截入て血を見るの

法ぢや。其代りこれで仕上げたらもう大丈夫ぢや。生死に間誤つくやうな事は決して無い。正に大安心の境界である。それでこれを透過すれば、天下獨歩で何れの叢林に行つても負けをとるやうな事は決して無い。曾て妙心七百の大會、衲の無字一則を透つたやつが一人も無かつた。

百六、拶處一斑

靈龜拽尾。これ禪病である。穩々地有一物。これ禪病である。この故に洞山は、三滲漏情見語を立て、學者を淘汰し。臨濟は三句。四照用。四料簡を以て龍蛇を格正す。真正見解を得るは、難中の難である。拶處は即ち禪病を破る妙薬である。學者往々無病の病にかゝる。この病甚だ抜き難し。衲は病は無いと極め込む漢には手がつけられ

ぬ。今一つは病除くも薬をたぬやつである。古人これを銷方といふ。又薬病同治とも云ふ。無字が真に透過されるれば、この禪病が無くなるのだ。

百七、無字の證據

無字を見たら證據を看せえ。大抵は一掌で来る。一掌で悪るい事は無いがもはや祖意に列したものだ。いはゞ皇太子が即位式を終へ玉ふたやうな者ぢやに、其様な芝居もうてまい。歡喜に満たされて居るほや／＼ではないか。宗旨争ひをする場合ではあるまい。そこで無字の證據が六ヶ敷のだ。衲の室内では大抵これで三年や五年かゝる。無字のかはきりが本當でないとか々の拶所で間誤つく。まごつくのは最初の無字がほんとでない證據。さあこゝで最初の打開の悪かつた事を證據だてた。又やらすのだ。更著精彩とは、今一入氣張れとの意ぢや。

百八、生死透脱の無字

已に無字をやつたら生死透脱即今何うぢや。大抵の漢が我這裡無生死と出かけるが生死を脱落した當體ぢや。中々そんなことではあつかぬ。喫人屎概非良狗ぢや。更參三十年と。又奪はれた。

百九、無字の姿

無字の姿は何うぢや。これが學者の胸腹痛ぞ。大抵の漢が自分の事と思つて、自分の姿を呈す。そんな狭い者では無い。自分を忘るゝことが出来ぬ。法執未だ除かざるものぢや。何時もこれで落第する。

千仞の功を一篋に缺く。もと根本智が虚偽だからだ。

百十、中峯八個の無字

中峰八個の無字。この出處知るものが無い。中峰曰。趙州因甚道個無字。此八個字。此是八字關字々要著精彩看。とある。無の見を破ぶる中峰の血滴々ぢや。何時までも無々と云ひたがる。書經には、刑期無刑といふ語がある。無字の要は無字で忘るゝにある。無字を忘るゝは自己を忘るゝのである。自己を忘るゝは、眞の自己即本來の面目に接觸し。大安心を得て社會に活動せんがためである。すでにこれ八つの數と思ふ。無の見を破ることに氣が付かぬぞ憂し。

中峰又曰。爾若依稀彷彿。半困半醒。似有似無。恁麼參去。驢年也不得發明。驢年は十二支に無い。馬はあるが驢馬は無い。いくらさがしてもみ

つからぬ。しつかり遣れと誠しめた。淺糸の長し短しむつかしや有無の二つを何時か離れん。

又曰。參禪全是一團精神。一團の二字字眼なり。無門の所謂通身起疑團といふものこれなり。體中が無字なれば、無字といふ邪魔物のよ

り付く所もあるまい。この體丸ごとの公案となしたら、別段公案のゐる隙間はあるまい。己に足て外に待つなき者即是なり。

爾若精神稍緩。便被昏散。二魔引入。亂想狂妄窟中。作顛倒活計。昏散とは昏沈掉舉といふ法相を略したので、掉舉は意馬心猿が狂ひ出す。昏沈は兎角寝入り込んで何の活動もなさぬやつ。氣狂に馬鹿に騒ぐやつと、妙に鬱ぎ込むのがある。躊躇するとさうなる。正念が相續せぬと、この二魔がつけ込んで境に奪はるゝやうになる。あたら一生を常樂我淨の四顛倒で暮ねばならぬ。單刀直入して逡巡すること勿れ。寶

師深更に板聲を聞いて忽ち無字を悟る。投機の偈に曰く。一槌擊碎精靈窟。板は槌で打つからさだ。精靈窟は靈魂不滅説ぢや。そんな邪魔者を擊碎してしまつた。突出那吒鐵面皮。那吒太子析肉還母析骨還父。然後現本身。運大神通力。爲父母說法。とあるから、何にも無い所からなんにも無い鬼神の鐵面皮が無而忽有にひよこりと出た。意識もない。分別もない。自己もない。又説に那吒は鐵の名處ともある。何方でもよい。兩耳如聾口如啞。滿身鐵になつた。云ふて云ふことを知らず。聞いて聞くことを知らず。しかし乍らこの鐵面皮中々物ぢや。うつかり觸ると火花が散る。手がつけられぬ。臨濟曰く。若約祖宗門下稱揚大事。直是開口不得。無備措足處と。この五祖頌は無字拶處の大難關ぢや。無字眞の境界を得ざれば、とても透過は出来ぬぞ。

了贊禪師の頌。趙州狗子無佛性。萬重青山藏古鏡。

無の佛性と讀むが可い。斷見になるから。萬重の青山は森羅萬象をさしたるもの。それが古鏡というて見れども見えず、聞けども聞えずぢや。無字のことよ。心のことよ。自己のことよ。その心にかくれる。三界唯一心。心外無別法ぢや。心佛衆生是三無差別ぢや。大きなものぢや。大絶方處細入無間ぢや。古鏡と書いて明鏡とかかぬ所が腕力ぢや。公案の見方が至つてざつとぢやから、これらのことも知り手が無い。この偈は白隠八難透の價値があるが力が無いとそれを看破することが出来ぬ。轉句に赤脚波斯入大唐。びつこの毛唐人が跋ひきつゝ、遠く大唐國に行たと。こりや全體何のことか。有功用か。無功用か。中々この句が容易でない。容易で無いですましておくまいぞ。毒啖は皿までが我禪の特色ぢや。八臂那吒行正令。八つ手の

ある鬼めが出て来て、打つ叩くとは、何を打くぞ。汝が千當萬當を打ちや。其意識を打殺すのよ。終擬問如何分身成兩段とは、この一句ぢや。

この則では本分あり。現成あり。掃蕩あり。建立あり。沒蹤跡ありこの一則微細にすれば宗通説通を盡す處があるが、たれも知る漢はあるまい。室内の調べて知れ。

百十三、大慧の無字

大慧曰。趙州無字祇麼舉と。唯の字。字眼なり。人生の動靜云爲祇麼に舉揚してもてゆけば、何物か妨ぐるものあらん。この拶所は案外に入りがたし。何時もムムでは透れぬぞ。再犯不容は禪家の通規なるを知れ。

百十四、無字をみて何にする

無字をみて何にする。大難關なり。無論人天を度せんがためといはねばならぬ。それはそれで可いが、人天を何ういふ風に度して行く。無字を見るべく、發心せしむるより外にない。もし命旦夕に迫り修するの暇無きときはどうぢや。逢茶喫茶。逢飯喫飯。逢生全生。逢死全死。其間餘念を交へざるを秘訣とす。白隠これを地限場限と唱導す。云ふことは甚だ謂ひ得たり。然れ共これ尋常の説。未だ人天を度するの語にあらず。畢竟如何。行到水究處。坐看雲起時。それならば較些子とでも云はうか。南天下ではそんなまどろひ問答は入用は無い。この指の先きで自在に濟度が出来るぞ。それは室内の極秘ぢや。冷煖自知するより外は無。

無字を見て何にする

百十五、無字の根原

無字の根原。無字がはじめ見えたらそれが直に根原ぢや。それにはやかう出さるゝと惑つく。みな間男禪ぢや。最初の夫を何うするのだ。うその盟ひか。買婦的か。何故はねつけぬぞ。間男氣の無いものは無いといふことぢやがさりとは人天の大導師たるもの、節操を全うするに何の遠慮が入らうか。何ぞ一刀に敵を刺さざるや。まづ師家から掃絶して仕舞へ。根が生えたら動けまいぞ。根だやしがさとの用處ぢや。獨立なるがゆゑに自尊。自尊なるが故に自由なり。雜血の子は愛國心が無い。モルモン主義は禪の大禁物なり。不見言。女爲愛己者粧。士爲知己者死。又曰。與君相向轉相親。與君雙棲共一身。願作貞松千歲古。誰論芳槿一朝新。古人曰君如何と參。

百十六、業識性の無字

業識性の無字。これは難中の難ぢや。なに難易は人にありさ。法の上には何にも無いのだ。趙州口皮の禪は應機接物自由自在ぢや。僧が一切衆生は悉有佛性なるに狗にかぎりなぜないかと問ふたら爲伊有業識性在と答へた所から出た公案ぢや。伊とは犬を指す。これは表ぢや。裏はこの坊主を指す。汝のやうな犬同様のやつぢやからあれが無と答へたのが分らぬよと。暗に無の絶對に脱落せるを舉示すれども犬の前に眞珠でとんと分らぬ。今室内では業識性の當體しらべ。憎い可愛い。惜しい。慾しい。の本體を參究するのが主眼ぢや。仁王經には。菩薩以煩惱爲菩提。凡夫以菩提爲煩惱とある。同じく水なれども蛇、香水爲毒。牛、香水爲乳やうなもの。今當體其もの

を究盡すれば畢竟空なるもので自性がなく、かたまりは無いから業識性がどれへでも行く自由をもつてをる。またこゝに因是善惡果是無記といふ事を知らねばならぬ。犯すべからざるを犯さんと思ふ動機。即ち原因には善惡はあるがいよく犯す即時には善惡は無い。それは結果であつて。無記といふて善惡に屬せぬものぢや。盗む。殺すも亦々しかり。罪惡は動機にありて結果に無い。これが一寸合點がいかぬ。業識性入用はこゝぢや。兎に角中々込み入つた公案で往々毫厘の差千里をあやまるぢや。

百十七、有の無字及び知而故犯の無字

有の無字。知而故犯の無字ぢや。ある時僧が狗子佛性を問うたら、有と答へた。趙州の手前には無も有も無い。共に絶對にして、這箇の一

聲を擲出したのだ。何の意識分別もはついてをらぬ。處がこの僧禮拜して出はせずして、反問曰。既是佛性爲什麼入皮袋裡。佛性があるなら皆金色の光りでも發する筈なるに、なぜ毛の生えた四足に生れたのだ。これ又多少の賊機を帯びてをるから。州は例の口皮禪で、それはナア、知而故犯すが爲めなりと答へた。汝のやうなそんな道理を知りつゝ、わざと問ひをまうけて、無駄の時を費すやつが、犬に生れるのだと、やはり根元につけ入つた。なぜそんな無駄のことをする。早く其佛性を實地に活動かさぬかとなり。此僧佛性の無自性なることが分らぬ。佛の地獄に入ることが分らぬ。そこで無繩自縛された。今の修行者が皆さうぢや。佛がいつも佛なら人形ぢや。木佛金佛石佛ぢや。地獄へも落るで衆生濟度が出来る。極樂計りに居たらとんと面白くはあるまい。しかし知而故犯すは、六道四生遊戯三昧の當體

で室内の要處はこゝだ。佛の境界をも意味する。どのやうにもとらるゝ。宗師家は語を生して使ふ。經家のやうに常套はない。自家の見識で自由に拈弄する。拈弄はとりさばくといふ意味ぢや。唯向ふのうはまへを取るといふことが濟度門の主眼ぢや。無字の拶處はさつと四十五則ぢや。今は其一端を擧げて禪をやる人の參考に供す。兎角今の禪は秘すべからざることを秘して、肝要の一件を嗟過して居る。つまり無駄な時間を智解の上用ゐて、途中で日を暮し。境界が少しものびぬ。一生無用の長物となり了るのが多い。皆是邪師の咎で如何にせば好き兒孫を擧げることが出来るかを、つくづく研究して居らぬからだ。必竟菩提道心がないからだ。今大革命の氣運に向つて居るのだ。

百十八、語の顛末

公案には一々語をつけさせる。修行者の最も難とする處ぢやが大抵は師家から教へる。句草紙の中の七言の處にあるとか。唐詩選の何枚目にあるとか。あて物したやうに探らせるもをかし。さて其語を知るは可いが、其語の眞意義の分つた者が居らぬ。それを懇切に説明せぬから、何んの事やら分らぬ。鸚鵡呼煎茶、與茶總不知ぢや。鸚鵡禪とはこの事ぢや。さう秘するにも及ばぬ。語は限りは無い。きまつてはをらぬ。それを師家が柱に膠するは、學人をして黄揚木たらしむるのである。未透底の者は意に參ぜよ。已透底の者は句に參ぜよとあり。語は至つて大事ぢやが、其眞正を知るものがないは、禪學衰亡の徴といふがよい。語には本語。呈解語。裏語。表語。總語。世語な

ど種々あり。一つの公案に十もつく語がある。中々それに無駄の時
間を費すは入らぬ事ぢや。衲の室内では大抵其境界に近いて來れば、
語は知らせて十分其真味を味はする。その語をいよ／＼手に入れさ
せねば、次の公案にうつらせぬ。それ故に一處通れば千處萬處一時に
透るやつが多い。よそのやつは梯子悟りと曹洞から云はれても仕方
が無い。修行の順序を誤つて居るからだ。

百十九、無字の總語

衲は江湖風月集をとつて居る。江湖集は禪宗七部書の一で是非座右
に備へておかねばならぬぞ。
雲遮劒客三千里。水隔瞿塘十二峰。といふのぢや。遠而遠の意ぢや。轉
沒交渉の意ぢや。未跨船舷三十棒ぢや。何んと云つても云へば未

ぢや。云はねば尙未在ぢや。劒客は山の名ぢや。瞿塘は川の名ぢや。
之は蜀僧送行の詩ぢやが、初めの二句を知らぬと意が通ぜぬ。丹竈
功成氣似虹(有意氣時添意氣ぢや)。掀翻丹竈到無功(不風流處也風流
ぢや)丹竈は仙人練丹の術で、我大悟底に比したのだ。初め入處した
ときは乾坤唯一人の境界で、人が馬鹿に見える。兎角悟が鼻の先につ
く。それを捨てねば本物でない。味噌臭いは上味噌では無い。臭い
が無くなるとうまくなる。無功用の境界は悟を忘れた處ぢや。それ
もまだ真正では無い。忘るゝといふ氣があればそれが矢張邪魔もの
だ。山上尙山ありぢや。其忘却底の眞の境界は容易ではない。無字
四十五則及びも無い事ぞといふので雲遮云々の二句が無字について
居る。其語の意味を教へたとて、何にも修行の害にはならぬ。知らせ
て練するがよい。

隱山家では、國有憲章三千條罪とつけた人もある。同じ意味ぢや。斯様なことを何故秘すぞ。すべて古人の著語を絶版せねばなるまい。今の禪のトンチンカンはこれで知れ。南天下の特色はこの無字四十五則で、修行の始終を結束するにあることぢや。これが他でないことぢや。安心立命宗通説通をこの四十五の中に歸納するのである。どうだ一番南天下の無字を透過する氣は無いか。その代り命懸けぢや。不入虎穴不得虎兒ぢや。菩提心ある者は即今來れ。來らざらんとするも得べけんや。

百二十、最後の一關

無字の最後に一關あり。抄云、四十四則はそれでよい。五位十重禁にもかけおふ最後の一決がある。教意にも祖意にも違はぬ所で、一句を

云ひもち來れと撈する。諸方でこれがやかましい。これ丈いで三五年かゝる人があるが、これは秘する必要は無。これを最後に置くのが間違ひぢやが、末後と最初と是一是二かと云ふことがあるから、末後を繰上げて最初とすればわけはない。さあ云へ。これが白隱の。悟後の修行はどのよな者ぢや。おばばしつてなら歌つて見やれ。さあその歌聞かう。速に歌へ速に歌へ。と云ふのぢや。さう苦しむることでは無いが、平生の垂誡が虚妄だから、やはり氣が付かずたうとら師家から云ふてもらうのぢや。禪は物を知るのでは無い。境界を観るのぢやが、今日の禪はあて者を見たやうに答へさへ合へばそれで可いことになつて居る。時をかける必要は無。ことに無茶苦茶に引ばる。それで畢竟云ふてもらうのぢや。それより一大事の眞の境界に、滿身の工夫を費さねばならぬ。物を知つても生死の絆が断れぬ

は何んでも無い。生死透脱は物を知ることには無い。物を忘るゝ境界が必要なのぢや。

百二十一、菩提心の一大事

この最後の難關といふのは、つまり菩提心のことぢや。これは最後に云ふことでない、初發心時便成正覺ともありて、禪に入る最初の誓願がこゝに在るのぢや。菩提心がなければ禪を遣つても何んの益に立たぬ。自分丈の安心のために遣るのなら止すが可い。とても眞の安心が得らるゝ者で無い。禪はそんな小さいもので無い。そんな小心とは相應せぬのである。釋迦は自分丈の安心を求むる修行者を聲聞辟支佛と唱へいたく撥斥された。寧ろ疥癬の虫となるとも、聲聞の身となるなと戒められた。五性各別は法相で説くが、聲聞は成

佛は出来ぬ仲間ぢや。そこでこれを焦芽敗種の徒と仰せられた。成佛の種子が焦けて仕舞うた恐しいことぢや。白隠も四十二の歳まではこれが氣がつかなんだ。正受老入に隨身たは二十六ぢやが、それから十三年といふものは、魔道に陥つて居つたと懺悔して居る。砂石集と申す無住禪師の草子を見て深く感ぜられた。委いことは菩提心偈に出て居る。春日神君が解脱房は名利のために佛道を修するというてあはれなんだが、明恵は菩提心ありとて、つねに親しくあはれたことから、菩提心なき學佛は魔道に陥るとあるを見て、寒毛卓立したとある。日々四句の偈は唱へてをるが、如何も無始以來名利の念にせきたてられて居るから、氣が付かぬ。菩提心とは、即度生心である。上求菩提、下化衆生である。上菩提を求むるは、下衆生を度せしが爲めなりと讀まねばこの句が生きぬぢや。元來天地與我一體ぢ

や。萬物與我同根ぢや。肇論に。至人空洞無象。而萬物無非我。造會萬物。爲自己者。其唯聖人乎。雖有神有人。有賢有聖。各別而皆同一性一體と。即自己と同一ぢや。自己がのびて萬物となる。萬物がをさまつて自己となつたのだ。石頭大師はこの語を讀んで大悟されて、參同契を作られた。菩提心は宇宙を救ふことで、何んだか餘り大きすぎる。傲慢のやうに見えるが、さうで無い。元來自己ぢや。三界唯一心ぢや。これが自然ぢや。自己自己を救ふのぢや。大小の區別あるのみぢや。聲聞は小自己ぢや、限られて居る。今は大自己である。無限無量である。釋迦は三界は我家ぢや。其中の衆生皆我子ぢやと云はれた。皆自己ならば大愛心が起らねばならぬ。活眼を開いて活世界を見よ。天地は皆我眼中に入るにあらずや。活慮を運らして活古今を見よ。古今は皆我方寸より出るにあらずや。試に眠り見よ。宇宙一時に去

る。醒來つて宇宙あり。宇宙は我造なるを知れ。睡中我我を忘る。忘るゝとして自己が無いのではない。醒めて尙この自己を忘るゝとき、自己の廣大なる天地と別物ならざることが分つて來る。この故に道元和尚は。悟りとは自己をならふなり。自己をならうとは自己を忘るゝなりとある。吾人所生の目的は外には無い。只この眞の自己を見て、この自己を救ふにあるぢや。自己を忘れて自己を見るを成佛といふぢや。吾人は只これが爲めのみ。即一切衆生を成佛せしめて、成佛國を造るためのみである。菩薩の嚴威儀。佛國土の因縁とはこれを指したものだ。

菩提心はつまり忠恕即ち思ひ遣りの心の向上したもので、人々多少か日々菩提心をつかふてをるが、名利が強いから、兎角衝突するのみぢや。内に省みて菩提心と相應して行くのが、佛道修行といふ者ぢや。この

故に菩提心なければ佛道無きなり。人の資格なきなり。人は只この菩提心の爲めに生れたればなり。斯様に大事なことを忘れて、たゞ小きこの自己の安心を得んとて、禪を修する皆墮獄の因である。猛省せねばならぬぞ。

百二十一、菩提心なければ無字なし

無字四十五則の最後の一決は菩提心である。これは實に最初に誓ふ事柄ぢやから、それで仕舞に置くは本末顛倒ぢやが、兎角忘るゝ漢が多から、これを難則としたのだ。云つて聞かすと、うんさうかとやす合點する。それなりけりになつて、矢張りもとの名利ぢや。そこが難則ぢや。これを知るのは誰でも分る。皆うんさうかとやるからだめぢや。今日日常果して菩提心に相應して居るか何うかは、深く反省す

る所にこの則が用があるのぢや。初めより此心なければ、無字がいくら痛快に打ち開けても、みな虚妄ぢや。只三密瑜伽即ち身口意一枚となり、至心に四句の偈を唱へ、諸佛菩薩に誓願せよ。衆生無邊誓願度。煩惱無盡誓願斷。法門無量誓願學。佛道無上誓願成。

百二十三、衲の發願文

衲は三十の年菩提心のことに感動した。大成寺晋山に中り、發願文を作つた。毎日日課として佛前で必ず讀誦して居る。

某甲。上求菩提下化衆生、衝天の志は、常住間斷なけれども、般若に於て未だ因縁劣機故に、願くは古人の心髓に、一々徹底し。吾朝、應。燈。關。の眞風を扶起し、天下の涼蔭樹と成て、廣く群生を度し、一箇半箇にても、有力の衲僧を打出し、佛祖の深恩に酬い

んことを。又伏して冀くは、食輪法輪をも能く轉じ、壽命長久し和合を專一にして、今日此會座に連る所の道俗男女を始め、山河大地、有情、非情、蠢動含靈。匍匐の虫に至るまで、普く一切衆生を濟度し盡さんことを。たとへ虚空は盡くるの日あるも、此願力は究りなき也。

明治二年のことぢや。四十七年前のことである。今日に至るまで始終一貫この發願文に辜負した事は一日も無い。法のためにこの心身を捧げて來た。そこで何時死んでも可いが、八十までは一寸死なれぬ。今すこし人を作らねばならぬ。一箇半箇でもとは、衲の謙遜ぢや。種草を作ると云ふ事が報恩の最大一ぢや。三寶の種を絶えざらしむるのである。可成澤山作つて死にたい。

百二十四、樞隱の初相見

樞隱は居士中の久參ぢやが、かれが初めて衲に參じたは、明治二十二年十一月廿日夜三更ぢや。戸を叩くものあり。何物ぞと誰何す。某甲奥州の飯田と申す者法の爲めに來れり。予曰く、法のためとあれば時をきらはず直に通れと。かれ三拜して四弘誓願を唱へ。且曰く、無常迅速生死事大なり。師乞ふ指示し給へと。予曰く、四弘誓願の事如何。只法の爲めに不惜身命なり。衲は四弘誓願が氣に入つた。かれは曾て十九年來佛通寬量に付て略一旦の光明は得て居つた。予抄するに、趙州露刃劍を以てす。彼躊躇す。南天捧をくらはすこと無數。翌日再び入室。立派に透つた。それより十年一日の如く、日夜に提撕して間斷する事なし。かれは生活難あり、繫累難があつたが、法の

爲めに萬難を排して、霜辛雪苦した。たうとう三十一年に大事了畢して、おれが印可の第一人となつた。十年で仕上げたは珍しい。只これ彼れが菩提心の強固なりしがためのみ。初めて知る勇猛衆生在成佛一念といふことを。衲はかれに説くにこの發願文を以てした。かれはこれを読んで感泣した。そはかれがつねにとる所の主義と明投暗合すればなり。かれはそれより菩提心に關する經論釋をしらべた。講釋はおれよりうまい。人かれを稱して菩提心と字す。かれも初めよりさうつよくはなかつたが、日夜人にもかたり、書物も讀んで漸漸本物になつた。かれの滿身は菩提心というてもよい。菩提心といふことを忘れさへせねば、初めは念が弱くとも漸々佛祖の冥助ありて、不知菩提心に同化さるゝ者である。菩提心なければ禪なし。菩提心なければ人なし。禪は菩提心によりて生命あり。人は菩提心の下

に資格を存すればなり。菩提心なき者は、人にして畜生道なり。其人は終に道を得る事能はざればなり。この故に梵網に曰、如是畜生發菩提心と。これ誰がことと思ほし給ふぞ。猛省せよ。猛省せよ。

百二十五、看經諷誦

經を看ば眼光牛皮だも穿つべし。則時何物かある。この故に天台は藥王菩薩品を讀みつゝ大悟し。永嘉は眞乎に涅槃經を讀む。六祖は金剛經の應無所住而生其心に感應道交して、直に黃梅に赴けり。經を看經を聞く豈に容易の看をなすべけんや。只至心なれ。一心不亂なれ。滿身其ものになれ。大凡天地は一大僧堂と看よ。其中の現象は一々の公案と觀ぜよ。何物が看る、何物が聞くと。其主人公を探れ。其物それよ。それがそれよ。求心止時元無事ぢや。看經亦別物なら

んや。唯有一乘法。無二亦無三ぢや。經を讀む又三密瑜伽なるべし。瑜伽とは相應なり。一致なり。餘念を交へざるなり。唯讀むなり。十指を合するは相應一致を表するなり。正身端坐して六根門頭に空缺なきこれ身密なり。滿身是聲なり。これ這箇なり。朗聲徹耳能所不二なるは口密なり。觀音入流忘所知とはこれなり。耳根圓通三昧なり。所は所なり。知は能なり。一になつて唱へ出せ。眼耳相交り念々正真是意密なり。耳に見て眼に聞くならば疑はしのきの玉水己れなりけり。舌根無骨即これなり。且く三に分つも現成諷誦の時何物かある。求全身不可得なるにあらずや。これ即本地本尊なり。如此若能く通達得大自在。動與不動當體寂滅。ぬけきつて落ちついた者。語與不語真箇圓融。念與無念究竟平等なり。只合掌して一心に唱へればよい。觀音經に曰。聞是觀世音菩薩一心

稱名觀世音菩薩即時觀其音聲皆得解脫と。音を聞くでない。看るのぢや。解脫は大悟なり。たれかこれを讀んで信受奉行せざらんや。不知の故に密なり。知らば真なり。故に密は眞の意味あり。衆生無邊等の四句偈は、看經諷誦の根本なり。日々一心に唱へて菩提心と同化せよ。

百二十六、山岡は經を寫した

山岡の誓願は、一代に一切經を淨寫するに在りき。いかなる日でも忘ることなかりき。法華に五種功德の一で、書寫功德ぢや。菩提心の實現ぢや。書寫の即時何物かある。即これ劍道なり。無刀流の根原は書寫の即時にあるぢや。一字一字大光明である。校合を納に托した。納はかれの寫したるや一々點檢して正誤したが、妙に書き損ないが無

山岡は經を寫した

○ 趙の慧為

かつた。字劃も誠に正しかつた。可惜可惜。彼は二十一年七月十九日午前六時胃癌で死んだ。病褥中といへども筆を投せず、十六日即死ぬる二日前までは寫して居つた。寫し得たる者九十四卷半であつた。一切經を寫すといふ誓願を立てたのだから、一冊寫して死んでも、一切經を皆寫した事になる。誓願心はつきぬ者である。乞食に施すといふ念は、世界中の乞食に施す事になる。あの乞食この乞食と取捨すれば、せまい施しぢや。心一つで大損をせにやならぬ。門に立ち物もふ聲を聞くときは、あはれと思へ施さずとも。金食がなければ思つただけにても、十方に手向ける分がある。山岡の願心は十方に遍滿し。古今に彌論せり。尊ばざらんや。余尙其三紙を藏す。字々其人に會ふ心地がする。

百二十七、山岡の死

五十三であつた。死に様も、流石平生の修行ぢや。誠に立派であつた。死する前に入浴して白衣を着袈裟を掛けて佛弟子たるを證した。端坐して、右左を顧みて一笑して其のまゝ死んだ。所謂坐脱ぢや。尤も胃癌であつたから自然枯れに枯れたのだから斯様なことも出来たのだが、又是常人の及ぶ能はざる所ぢや。辭世の句。腹はれて苦しき中に明烏ぢや。胃癌は腹が脹れる、痛む病氣ぢや。苦い事は何時も苦しい。除ふとすれば益苦を加ふ。苦を苦とすれば苦は自ら消ゆぢや。どうしてもさら樂に死ねる者でない。湛然として惑つかねば可い。坐脱立亡不無先師佛法夢未見といはれぬ様にするがよい。兎に角山岡のは、立派であつた。かれは常にいうた。命を捨てたほどさつ

ばりしたことは無い。維新のころ幕府と朝廷の間に立ち、西郷に談判に行つた時ほどきれいなことはなかつた。からだの底から水であらつた様な氣持がした。もとより、身命を抛捨してかゝつた。身を捨て、浮む瀬ぞありと實驗したといひよつた。しかし今少し活かして置きたかつた。嗚呼、今や無し。

百二十八、山岡に初めて逢うた

は明治十八年で、あれが四十七の時であつた。本山管長無學和尚から東京の禪を督せよとのこと。而も輦轂の下あに容易の看を許さんや。且悦び且つ恐れて、予に隨從せる大衆（この時は大和の白崖山僧堂にありき）を連れて、麻布の曹溪に留錫した。鐵舟來りて五位兼中、到の兩刃交鋒不用避の公案に付て入室す。彼從來の見解を暴露す。衲

は其根本の誤れるを説く。かれは偏中至を兼中到と誤つてをつた。これ五位顯訣を看ざるの過にして、回互と不回互との差を知らざるに坐することを喝破した。白隱の當時惜いかな顯訣世にあらはれずして看るの機會が無かつた。偏正五位を功勳五位とあやまつて居つた。それも自己の宗旨の上から五位を扱ふのだから、白隱底は少しも増減する所はないが、洞山流の五位は、白隱に於て未だしであつた。我等末學のものは、顯訣によりて五位の真相を剔出し、白隱老漢をして地下に遺憾なからしむるは、兒孫たる者の孝道ではあるまいか。山岡にもとくもとくとこの旨を注射した。かれは英靈だ。よく其意を體した。それよりかれの意思は一變して、何に思ひけん一刀流を無刀流とあらためた。この兼中到實は偏中至なりしを知りしに因するのであつた。山岡と衲との間は、かくして道交が密々に深くなつた。そこで、

山岡に初めて逢うた

百二十九、明治十八年市ヶ谷道林寺

を建て、納に與へた。かれも金は無かつた。毎日々々道林に、米五升と酒一升を携へて、寺事を督した。酒は好きであつたが、飲めばますます勇がまし、真面目で議論が明晰であつた。道心の寤寐恆一を證するにたる。暇さへあれば入室ぢや。一日かれの自宅で入室を聞いた。(公務多端殊に恐多くも、陛下に咫尺し奉つる身分で、道林に來ることが出來ぬことがあるときは、時々この方から歩を拄げていつた) 丁度臨濟麻谷賓主互換であつた。互に組みつ組まれつ、能處不二偏正回互の當體を演じた。衲も其時は力も強かつた。かれを靠倒して障子をへし折つたことがあつた。家内では喧嘩が始つたと思ふて、大騒ぎをした滑稽を演じた事もあつた。乗りかけた舟はどんな嵐でも乗りさる

といふ性質があつた。

百三十、陛下御參禪の御所

を作らふとて骨折つた。山岡がいとと斡旋した。時の東京府知事は高崎五六で、たうとう寄附帳に印をついた。それが明治十九年十月で、山岡は帳面の冒頭に、有信者發菩提心と大書した。惜哉居士も死し衲もまもなく松島瑞巖へ行かねばならぬことになつて、其の擧は一時中止したが、古例もあるから是非御參禪の行宮を造つて置きたい。今に其念はある。恐多くも陛下をして御道心を發起し給ふやうに申しあげ奉るは、臣僧等の忠節の上はあるまじきと思ひ取つてをる。思ふ一念は岩をも透すといへば、兎も角も古例をよぢて早晚御參禪の御行宮を造らねばならぬ。

百三十一、眞の報恩

心地觀經に報恩品といふのがある。四恩を説く密なり。父母國王衆生三寶の四恩これなり。この中何物か尤も大なる報恩かとなれば、それが經に説いてある。衲は若い時にこの經を讀んで深く感激して、一層菩提心を増激したことがあつた。

佛は四恩の眞相を説かれて、最後に眞の報恩は果して何んぞとの五百の長者の問ひに答へて曰く。

三種の波羅密多あり。この内一のみ眞實なりと教示された。一には布施波羅密。二には親近波羅密。この二は共に何物も布施して惜まざれども、布施するといふ心がのこつて、無縁の大悲といかぬ。親近とは眞實に近きまでなり。いづれも有相の上に限らるゝ。獨り第三こそ

眞實なりと説いた。其文に曰く。

善男子善女人。發起無上大菩提心。住無所得。絕對に人を救ふの念を發起し、自己の所得を思はぬ。但し無所得の眞意義は甚深なり、勸諸衆生。同發此心。以眞實法一四句偈。施一衆生。使向無上正等菩提。是名眞實波羅密多。一四句偈は四弘誓願なり。波羅密多は、到彼岸と譯す。この苦岸より、かの樂岸に到らしめんとす。菩提心の事である。

前二布施有所得心。第三施者無所得心。以眞實法施一有情。令發無上大菩提心。是人當得證菩提。時廣度衆生。無有究盡。紹三寶種。使不斷絕。以是因緣。名爲報恩。

報恩の一番大なる者は、是事を一切に手向けるより大なるはない。即衲がつねに云ふ菩提心である。古より父に背き、母に背き、君に背くも

のありて、往々人の誤解をかふことあるは、より大なる報恩底あるを信ずればなり。報恩心もうつかりすると、べけになる。深く思惟して恩を離にしてかへさぬ様に氣をつけよ。大功不願、細瑾ぢや。只心地觀經、報恩品の終りを讀め。

四恩の中の前三は世間門。後一は出世間門ぢやが、これを一つとして唯四恩とひつくるめたのは、眞俗不二の當體を示した者だ。前三とても後一が添はねば皆駄目だ。龍を畫いて睛を點ぜざる者ぢや。出世間の人も菩提心がなければ飢ゆぢや。世間の人も菩提心あればつねに腹便々ぢや。

百三十二、兒玉將軍の禪

兒玉は徳山の者で、衲が大蔵寺中に時々やつて來た。中々子供の時か

ら才子で、一を聞けば十を知る性であつた。早くから無字隻手は人の知らぬ間に透つた。中佐時代であつた。一日入室に來た。軍人たるものの禪は何うぢやと問ふた。衲は即今無相三千の兵を使ふて看よ。しからは戦ふて勝たざるなけん。彼曰く。目前兵なし何を以てつかふことを得ん。衲曰く。いと易きことなり。それが使へぬやうでは軍は出來ぬぞ。かれ少く色を起して、しからは老師やつて看よ。よしさあ馬になれといきなりかれの背にまたがり大聲に呼んで尻を打て曰く。大隊進めと。彼衲がこの一氣呵成の作略端倪するに違あらざるを看て、深く得る處あり。衲を乗せたるまゝ分つた分つたといふて、衲を禮拜した。これよりかれの軍事上の技倆著しく進歩せしを見る。餘念を交へざるを知らばなり。境に奪はれざるに體達すればなり。それからといふものは、餘り入室もせぬが、かれに於て禪界に効績

を奏せしは、一偉人を予に介せることなり。誰ぞや誰ぞ。乃木將軍即これなり。

百三十三、乃木將軍の初發心

は明治二十年の十月で、兒玉の紹介で來た。生死事大無常迅速如何が覺悟せん。衲曰く。忠義の上に生死なし。又問ふ。生死なき底の事いかん。衲曰く。修して知れと。其時衲はかれに授くるに趙州の露刃劍を以てした。彼は日夜にこの則を提撕して精練苦修十年一日の如くやつた。時々入室して南天の痛棒を喫する幾許なるを知らず。予はかれの久々に純熟して妙境に達するを知るといへども、依然として許さず、惡辣の手段を以て鉗鎚を加へた。かれ又屈せず。愈入つて愈堅し。中々尋常の修行者と同一視することが出來ぬ。遂に大い

に得る所があつた。日清日露に彼の偉功を奏せし所以職として苦修の力によるを疑はぬ。古人曰。刻苦光明必盛大なりと。將軍に於て見るべきなり。

百三十四、口邊白醜を生ず

かれは如是熱烈に禪を修するも、つねに黙々として禪のことを語らず。只潜かに修して自得するのみぢや。古人の所謂口邊生白醜心經苦生ずといふはこゝだ。これが修禪者の眞面目である。今の僅に一則を透れば、大口を吐いて人に誇示する僞禪者と同一に語るを許さずぢや。しかし室内では中々猛烈にやつて來た。臨機不讓師の機鋒があつた。衲もかれの一掌をうけたことがしばしばあつた。禪者の行履は正に將軍のやうにあるべきぢや。凡とも聖とも分らぬ。知つてをる

のか知らぬのか分らぬ。其蹤跡を窺ふことが出来ぬ。かれは眞面目の好箇の軍人ぢや。たれも禪を修したといふことを知らぬ。こゝが妙ぢや。然れどもかれは端坐黙念して夜を徹したことは少くなかつた。風にも雨にも閑を盗んで入室は怠らなんだ。

百三十五、將軍との因縁淺からず

將軍の東京を去て仙臺の師團長となるや、丁度柄も松島の瑞巖寺に居た。時々往來することが出来た。瑞巖寺へは日曜などにはたびたび來られた。ある時に二兒を携へて來られて松下で一處にうつした寫眞も忘れ形見に今にのこつてをる。將軍の去つて臺灣に行くや、柄も又た去て西宮に來た。戦役後は柄は毎月東京に往來することとなつて、時々乃木邸に行くことが出来た。實に因縁の淺からぬことであ

つた。

百三十六、乃木將軍は坊主嫌ひ

との噂があつた。其筈よ。今坊主の墮落を好くものがある筈はない。まして清廉高潔なる乃木將軍に於てあやぢや。そして宗教がきらひで宗教家の出入をいたく迷惑せられた。自己の宗旨があるから別に宗教をまつのは無い。ましてや現時の腐敗せる宗教界いやがられたも尤もぢや。しかし現今の坊主と宗教をさらはれただけで眞の坊主眞の宗教に向つて愛憎を起すやうなことは無い。常に佛教の難有いことは説かれた。奥さんなども看經はなさつた。柄は十句觀音經を教へてあげたことがあつた位ぢや。しかし長い間往來して共に酒を飲んで談笑した坊主は、恐く柄の外にはあるまい。酒は好きぢやつ

乃木將軍は坊主嫌ひ

たが大酒した事を見ぬ。肴は豆腐か目刺ぢや。納は無論精進ぢやが豆腐より外おごつた事はない。飯は例のひえ飯ぢや。なみくの坊主ではとても交際が出来ぬ。納は何時ものまづいものを食つて平氣ぢや。なに酒を飲むに肴は入らぬたちぢや。ひえ飯も腹の減つたときには案外うまい。對食の五觀にも、正事良藥爲療形枯とあるではないか。吾人は何時も法喜禪悦を以て食として居る。將軍との會合には飯食以外の妙味があつたからだ。坊主嫌ひでなかつたのだ。本當の坊主は大すきぢやつた。人の真相は噂ばかりでは分らぬ。

百二十七、 殉死の時萬歳の電報

殉死の報傳へらるゝや、納は乃木家に向て左の電文を發した。

ゴフウフジユンシト。ナンテンボウ。ナミダナガラ。パンザイバン

ザイ。

この意味は死んだ將軍でなければ分らぬ。さだめて地下に瞑したであらう。

百二十八、 自刃の原因

に付て其當時も今もいろくに論ずるが、兎に角誠忠高潔の人のなす行爲は必ず誠忠高潔には違ひない。この因には必ずこの果ありといふ、不變律に照しても分る。さう推測して置いて、超越的に解釋するが、一番近道のやうに思ふ。其餘は乃木將軍と同心又はより以上の精神でなければ知ることとは出来まい。そんな人が現世にあるであらうか。それぢやから只單に高潔なる行動をなされたと畏敬すればよい。軍神又忠神として尊崇すれば可い。しかしいろく世間に云ふて居

るから將軍と因縁深き衲の評唱は人が興味を以て迎へるだらうと思ふから衲丈の付度をしてみやうか。

將軍は意思の餘程強い人であつた。一旦心に思ひ定めたことは、必ず決行する。これが即武士道といふ者ぢや。將軍は十年西南役に聯隊旗を敵に奪はれた事があつた。君辱臣死の本文で將に自刃せんとしたが、兒玉に君國の危急を説いて死ぬに死なれぬことになつた。そこで決心其物からこの身體を若干時間かられた。果して日清役が始つた。こゝぞよき命の捨て處と彈丸雨飛の間を突進したが命を捨てた躰には、流石の彈丸も射ぬくことが出来ぬと見えて、こゝでも死なれなんだ。結果三國干渉となつて、恨み骨髓に徹した。惜しからぬ命を又借用して、日露役に出た。旅順の惡戦に参加して、無数の兵を失ふた。然れども勢遂に我手に歸した。もうこゝで自刃して十年の

意思を決行しやうとしたが、又々因縁深き兒玉が、先帝陛下の叡慮を帶て諫止した。精忠無二の將軍帝命何ぞ拒むを得ん。又死ぬに死なれぬこととなつた。凱旋しても心快々として樂む所なし。何を以て郷國の父老に見えんの詩もあつた。それから學習院長となつて、華族子弟を武士的に養ひ上げた。辨當は梅干一つぢや。衣食住の贅澤は決してしない。僅にこの身體を借りたのだから、給料は部下に分ち與へ、衣食は最下の物を用ゐた。そこらが出来ぬところだ。さて恐れ多くも、先帝陛下には遂に御崩御になつた。旅順の命を永らへしは、先帝陛下の天命ありしたためのみ。今や陛下なし。正にこれ死すべきの時なりと、斷然決心した。要するに將軍の死は、十年役心に誓ふた意思を、二十五年後に決行して、武士道を全ふされた。武士が武士道を全ふするのがとりもなほさず武士道禪ぢや。實に衲が意を得た

る者で、衲は電文に涙乍ら萬歳々々とある所以である。さてこの自刃が幸ひに將軍平生の個性を發揮する媒となつて不忠不孝の徒の心膽を寒からしめて、著々世を覺醒して行く。個性は善にまれば善にまれば、自刃といふ者により大に人の注目をひく心理作用があるもの。それは死といふ者は人に感動を興ふる最も強きものなればなり。しかしそれは結果で、それを目的として自刃したのではない。そこで一重尊い處がある。衲の詩の別語に、乃木哉乃木哉。乃木以前無乃木、乃木以後無乃木。嗚呼贊嘆有餘矣。とした所以である。

百二十九、乃木將軍と季札

支那に季札といふものがあつた。君命を帯びて使す。途中友人徐君を訪ふた。季札が帯べる劍を欲しがらる。季札口には云はぬが心に與

へんと期す。使命了つて歸途再び徐君を訪ふ。徐君は既に死んで居つた。劍を解いて徐君が塚樹に懸け拜して去つた。これも一たび心に誓ひし意思を時をへだて、決行した適例である。季子曰始吾已心許之矣。豈以死而背吾心乎と。乃木將軍や、これに髣髴たり。禪に入る初一念は菩提心ぢや。途中果して如何。もし名利に誘はれて半途退菩提せば將軍に向て何の面目かある。猛省せよ。猛省せよ。

百四十、將軍西宮海清寺に來る

丁度自刃の前年ぢやつたが、わざ／＼衲を海清寺に訪はれた。受付に權隱が出た。私は乃木ですが、和尚はいられますかと。權隱あはたゞしく取付だ。衲は直出迎へして隠寮で久しぶりに白鷹を一盃やつた。談笑數時間、何時になく愉快氣に見え、庭の掃除の行き届いた事など褒

將軍西宮海清寺に來る

められ、衲が健康を痛く悦ばれた。隨行は停車場に待して自分獨りて、軍服は着けて居られたが、勳章などは帯びられず、例の質素の風だから、たれも乃木さんと知りてはない。しかし脊の高い瘦せて何となく不可侵風彩ある一偉人たることは誰でも見る。談偶正成のことに及び、正成ほどの者が討死の前に生死の事をわざ／＼廣嚴寺の俊明極に聞に行くなどは、如何も私には受取れぬといはれた。衲曰、果然々々、閣下にしてこの言ある、將に其分なるべし。何故なれば、閣下はしばしば生死の間に立て實驗されたればなり。しかし尋常生死のことは、透脱中々容易でない。百丈は馬祖にいたく鼻を拈られて所知を忘じたが、後再參して一喝三日耳聾することあり。衲も關山國師に付て平生遣つて居つたが、まだ一寸竹膜を隔てた者があつたと見えた。この世の思ひでに道を訪ふは、寧ろ其餘裕ある所を稱へねばならぬ。か

れも明極の一喝にあうて、白汗踵に至つた、實にこれ。「あら樂し思ひははるゝ身は捨る浮世の天にかゝる雲なしてあつたであらう。將軍曰、私は老師に初相見の時、忠義の上に生死なしと云はれたにいたく感激した。其後露刃劍の則で數十年練つてもやはり忠義の上に生死なしぢや。私は露刃劍は忠君の天地一枚ぢやと思ふ。お蔭で生死には惑つかぬと一笑された。時間に限りあるからとて、飄然として立去られた。後に思へばこれがこの世の見收めであつた。思ひ出せば涙の種ぢや。それから停車場まで見送つた。時を待つ間に種々筆談を試みた。今尙これを藏す。因にいふ寺中に戦死軍人の碑が林立してをるのに將軍はしば／＼黙禮して過ぎられた。兵を愛するの衷情が溢れてをつた。見るもの感泣した。

百四十一、遺族よりの形見

として墨跡十數枚。中に六疊敷一ぱい、忠魂碑の三字を大書せる者あり。立派に表装して保存してある。二百三高地で被つて居た軍帽も贈られた。これは伊丹の由多加織開祖寺西幾久松居士に與へて祠を建て、祭らせてある。其他生前用ゐられた膳腕も貰うた。これらは丁寧に保存して記念品として誰れにても拜見せしめ將軍を追懷せしめてをる。殊にしはみばは自刃の當日寫された寫眞は見るも涙の種である。通常あるのは帽子を脱いである。其日は軍帽を着たまゝ寫してある。

百四十二、坊主の葬儀に列せしは衲一人

無論神葬であるから坊主が立寄る必用は無いが、衲丈けは生前師弟の關係から親しく參列した。尙乃木家にては棺前に三歸戒を授け血脈を入れてやつた。實にこの葬式は古今未曾有で、三十萬も出たとのこと。將軍の徳望はこれでも知れる。

百四十三、第二隻手音聲

は白隠が拵へた公案ぢや。無論さとりには無いら、無字を悟つたも隻手でやつたも、寸分違ふ筈はないが、人の性質により、公案に適不適がある。そこで白隠は無字で永年かゝつてもいかぬやつは、隻手で惰性を取り去り、心機を一轉せしめたといふことぢや。これは師家の手段としてさもあるべきことぢや。すべて公案と云ふものは、一旦迷はするやうに仕掛けてある。迷悟は元來生れてのち聞

いたり見たりした悪知悪覺のいたすところで、この所知障が三惡道を造り出す。靈魂を認めるのもこれから出た。さかぬ前即未生已前には、そんなものは無かつたのだ。知らなんだのだ。必竟妄想といふものは、生後見聞覺知によりて建立された餘計物ぢや。これが何時も生死を認め、涅槃を認めるぢや。そこで公案は妄想の根原を勘破して、未生已前本來の面目に歸せしむる道具であるから、始め妄想のありたけを出さしめ、妄想と戦はしめ、いよく妄想の寄付く鳥の無い所まで工夫さす。さうすると佛性が現前して来る。これを大悟といふぢや。大悟といふて別に得るものがあるのではない。妄想の除かれた場合を指すのだ。其處を三祖大師は、莫求眞只可息見といはれた。除かうと思ふ念ももと迷ぢや。除くべき妄想とて別にあるのではない。見を息むべし。見は邪見ぢや。つまり餘計な苦勞

をするなと云ふほどのことぢやが、世の中は皆餘計の苦勞をする。白隠は三合の病に、一石八斗の物思ひといふてをる。しかし息めるには順序がある。一時に息むものでない。まづ妄想は出さるゝだけ出すがよい。見たり聞いたりしたことをありだけ出すともう出す者が無くなる。こゝを心路絶すといふ。こゝまでこぎつけさせるのが正師と云ふものぢや。半途にして腐らかしては、鳥にはならぬ。今のは十日位にしてくさらかす。二十一日までやる根氣がない。鳥にだも如かざるべけんやぢや。片手で音が出るものか。両手から勿論出るが、片手で音の起り様が無い、それをもつて聲出して見いといふのだから、中々六ヶしい。そこでのろくろ工夫に工夫をかさねてもどうしても理窟にあはぬ。そこでとろくろ理窟を捨て、聞かぬ前、見ぬ前の身體になつて、こ

の問題を解いて見よ。わけはない。聞かぬ前には聞いても聞いたと思はぬ。見ても見たと思はぬ。聞かぬのではない。見ぬのではない。見聞以前の身體になると、見聞以後の身體ぢやものなれる筈がない。こゝが公案の入用のところで父母未生已前といふも七佛已前四時春といふもやはり名で、見聞後のことで、こゝはこの身心を脱落せしめねば、何時までも掛合になつて、光風霽月の境界になれぬ。たゞ正師の鉗鎚を得て工夫して行くと、たうとう脱落といふ境に體達する。手の舞足の踏むを知らぬ大歡喜が起るのである。公案は提水吹火といふて、一旦十分迷はして、其迷ひを消して仕舞ふ。もう迷ひが起らぬやうに根絶しをしてしまふ。隻手はその道具と思へば可い。

大抵は隻手を出して、従前の惡知惡覺を切斷しやうとする。或は一

掌を與へるものもある。切斷しやうとすれば切斷するものは無い。水上の胡蘆子の如くて、觸れば逃げる。手が着かないのが、隻手の聲ぢや。白隱の畫に布袋が片手を出して居る所が書いてある。しかしさう形にあらはすものでもない。形にあらはるればそれきりになる。固着してしまふ。形の上にはあらはるゝ前に、深く自知する要處がある。この要處に達せずして、手を出すから窮屈になる。境界から出たのなら手でも可い。そんなら何んなものが代用になる。それ迄は云はれぬ。隻手に何の聲があると、無理會の處に向つて、工夫を下すと分る。

百四十四、商人の隻手の歌

ある商人が隻手の工夫を三年して見たが、一向に分らぬから、自暴を

起して、
 白隠の片手の聲を聞くよりも、兩手を打つて商をしよう。名案なり。
 その通りぢや。何故この歌に精彩をつけぬのだ。丸出しを云うてを
 るが、自ら歌つて自ら知らずぢや。氣の毒のものぢや。これを海神知
 貴不知價。又弄物不知名ともいふぢや。乃て白隠が次の歌でねうちを
 踏んだ。商が直に片手の聲ぢやもの、兩手を打つはいかい御苦勞。こ
 の歌の方が實は下手いが、これは知つていふ。彼は知らずに云ふの差
 天地なり。こゝでは商はすべての現成公案を指し。兩手は意識を指
 した者ぢや。この天真爛漫でよい。それに何にも注脚はいらぬ。し
 かしさう胡椒丸吞にしても、境界が其處に至らねばやはり智解の分際
 ぢや。益にたゝぬ。そこで練ねばならぬ。

百四十五、峨山の隻手

白隠當時、峨山といふ豪傑があつた。當時すでに三十五人の善知識
 を破つて、天下無敵なりと思ふた。しかしまだ白隠に遇はぬから、
 一日機を得て入室す。白隠大に罵て曰く、何處の悪知識からそんな
 悟りを覺えて、そんな醜體を演ずると。打て打て打ちのめした。峨
 山屈せず。白隠愈出で、愈酷なり。たうとう我を折て開示を乞うた。
 白隠こゝに於て隻手の聲を聞いて來いと、何と云つても許さぬ。峨
 山刻苦不怠四年を経。白隠其時年八十。知るべし室内の峻峻なりし
 ことを。時々東嶺和尚にも參じた。もはや法の爲めに私はない。名
 譽心も何にも無い。十年の後たうとう隻手を打貫いた。後年化を布
 くにて中て曰く、我白隠の道を尊ばず、只十年間われを引きつけて説破

せざりしを尊ぶと。容易の看をなせぬ處だ。今の學人めは、一年も叢林にをると、直に隻手を透つたといふ。片腹痛きことぢや。何處でやつて來ても、一たび南天棒の點檢を経ざれば隻手を見たとは云はさぬぞ。

百四十六、隻手と無字と何か異か

無論悟りに二つは無。夫故に無字を看て、又隻手を看ると云ふことは、所謂徳を二三にするもので、まを〇〇〇禪ぢや。何方からでも、一つやれば融通せねばならぬ。今日の學文禪では、それを違ふやうに思つてゐる。なに隻手ばかりでは無。何んの則でも悟る一刹那は皆同一ぢや。そこで隻手で無字を悟つたとも言へる。無字で隻手が分らねば、やはり無字が見えたのでは無。白隠も無字では大分骨折

つた。正受老人に鼻を拗折られた。何と云つても許さぬ。遂に南泉遷化の話にかへた。これが惰力を破ぶる師家の方法で、白隠も初の無字で先入爲主で、何うしても初一念の悟りの塊が取れぬ。其處を正受老人見て取つて、則をかへた。一日托鉢の際俄然として所知を忘れた。茫乎として我を忘れて、門外に立つ。下婢はこれ狂人なりと見て、箒を以て打つ。忽ち氣が付いて直に正受到參ず。何にも云はぬ。只自得の顔色あるのみ。正受は汝已に徹せりと許した。この時は南泉遷化で、無字を悟つた。無字と南泉遷化と所知を忘ずる點に於て同一なればなり。わが室内では人によりて、隻手を見せると、無字を見せるとあれども、いよく入處を得たときは、融通無碍の力を得る。南天下の禪は梯子で無いことを知るが可い。いま諸方の相似禪をやぶるため、隻手に四十八の拶處を置いて淘汰の法となしてを

隻手と無字と何か異か

る。

百四十七、拶處一斑(再び)

(1) 隻手の證據。勿論無字と同じ。自在に證據は出せる。眞の隻手は隻手を忘るゝ所にあるぢや。まづ隻手は何物であるかと參究するが可い。片手を出せば片手に捉へらる隻手魔ぢや。無孔鐵槌當面擲の境界で出すのなら、別にいふ所はないよ。その相似を看破するのが師家の用處ぢや。何物か隻手の證據。左右を顧視して曰。看看。(2) 隻手を切つたらどうなるぞ。これが室内ですごい遣り方ぢや。大抵の者が閉口する。何にを出しても切斷する。此方からさあお切りなされと、無限に出して行く。隻手が眞に手に入つたら出方に要處がある。元來隻手といふ者は切れる者かな。こゝが參究すべき要點

ぢや。有力の人ならば、師家を閉口させることが出来ねばならぬ。出身の一路と云ふのが此處ぢや。野火燒不盡。春風吹又生。

(3) 隻手を團子にして呑んで見よ。これはわけはない。しかし法身邊量に陥り易い。機不離位墮在毒海ぢや。まづこれを掃蕩門にとればよい。本當に勦絶せねば皆無益ぢや。

(4) 呑んだ團子を吐き出して見よ。これでは皆汗をしぼる。隻手元來無自性なることに體達せぬからだ。呑んで吐くことを知らねば、腹に障つて、病となる。なに即今吐き出しつゝある。腹の中には片時も滞在をせぬ筈ぢや。これが吐而吐くことを知らずぢや。見不見暗昏昏ぢや。

3, 4の二則は八難透の牛窓櫃の話である。こゝを透ても牛の姿を出して見よといふと、吐き出すことが出来ぬ。所謂釜かぶりの道中禪

ぢや。融通力がないからだ。

(5) 富士山頂上の隻手のこゑは何う聞いた。團子を吐き出したところぢや。何處でも吐き出さるゝぞ。どうも隻手の餘習が取れぬ。何時も片手を出したがる。生死の癖をとるのが禪の肝要の處ぢや。海抜一萬二千尺に上らねば、本當の處は分らぬ。故に曰高々山頂立。深々海底行と。かくは見性せねば皆嘘ぢや。

(6) 隻手を聞いたら即今生死の絆を何う断つた。獅子尊者曰。身非我有。何惜於頭と。白刃前に閃めくも、寂然不動の境界ぢや。死ぬるとき許りでは無い。順境逆境に回轉せられずして、自由脱洒に活動するのが絆が断れたといふ者ぢや。室内で師家を罵倒し、一掌を與ふるの藝は出来ても、心は源平八島の戦ひぢや。この則大難大難。料頭箕踞長松下。白眼看他世上人。

(7) 隻手眞の境界。境界といへば、水甕から火でも出るかのやうに思ふが、さうではない。日々眞の境界に入つてをるが、添物があるから偽境界になつて、脱洒に行かぬ。趙州は平常心是道というた。修行が鍊れて来ると、語脈裏に轉却されぬやうになる。象筩六十眞境界というたが、しかしこの境界に體達するのは容易ではない。二十年四十年と聖胎を長養するのも皆この眞の境界を得んがため。習氣が強いから、どうしても尾をひきたがる。露が滴りたがるものよ。人多くぬけきる方に重きをおいて、習氣の強きことに眼をつけぬから實地に方て大に惑く。見惑頓断如破石といへ、思惑難断如藕絲ぢや。明眼之人依甚。紅絲綜不断なると。松源が云ふたも此處ぢや。そのこの眞境界は解し易うして得がたしぢや。老倒踈慵無事日。安眠高臥對青山。

(8) 隻手兩重の難關。これが實に大事の撈處ぢや。既透關即掉臂度關不問關吏といふ事があるから、白日青天の身ならば、一關すでに無事なり。天下何れの處か誰何する者あらんや。第二の關門に至り取調べを受けねばならぬといふのは、尙心中罪惡の殘物があるからだ。そこで何の公案も、皆兩重の難關ぢや。道本圓通。人本無罪。只ゆめに罪を犯し、醒て後も其罪を忘れざるに似たり。高山彦九郎の自刃は、其原因を知る人なし。山陽は恐くは夢に不忠の舉動ありしを思ひしによるならんと評せり。さりとてはあまり頑忠ぢや。罪あれば懺悔すべし。懺悔せざれば罪益甚だしとある。死んで仕舞ては懺悔する餘地がなくなる。第二關がとほれぬとて禪をやめては所詮がない。今日の禪者が、この兩重の關に至て多くは皆挫折し、御師家様にいうてもらうて、分らずやの間に第三關に進んで行く。やはり刑狀

もちぢや。こゝに至り更に精彩を著けて猛進せねば、何時まで行つても果しはない。白隠がこの則を設けしは、人の根機だめしなり。出故は惠琳大姉への印可狀、予が兩重の關を透得すといふ語が入つてをるから出た。つまり悟りの根絶しぢや。正偏を忘れねば、五位の關は透れぬ。道元和尙云、當にしろべし。真空はこれ正にして、妙有はこれ偏なり。真空の妙有なるは、正中偏妙有の真空なるは、偏中正といふ。正や正に住せざるが故に來。偏や偏に居せざるが故に至といふべし。作廢生か、是兼中到。不言不言と。兩重の難關は、即五位の境界である。否五位の境界が、即兩重の難關である。是に至り佛見なし。法見なし。無字を忘れ、隻手を忘れ。大びまのあいた處が、隻手兩重の難關ぢや。もし眞に此關に參ぜんとならば、左の偈に參ぜよ。劫火曾洞然。木人涙先落。可憐傳大士。處々失樓閣。彌勒もこゝに至りては、退倒三千。

(9) 隻手向上の一句。これも餘習をとる道具ぢや。向上の念に縛られて自由が得られぬ。向上を與へて向上を奪ふ。提水吹火ぢや。不重己靈不慕諸聖の境界ぢや。其處でこれも難則ぢや。

(10) 隻手末後の牢關。もはや再犯不許ぢや。さら難關がたび／＼あつては、やはり梯子悟の批評を免れまい。出故は巖頭が大小徳山未會未後句といふに起つた。これは巖頭の賊機である。無門は識得最初句便會末後句といふてをるから、無字が分れば隻手は分らねばならぬ。浮山曰く、末後一句始到牢關と。始ての字字眼なり。この牢關を打破するのが、隻手の修行ぢや。大道無門何れの處かこれ關。速道速道。夜をこめて鳥のそら音は計るとも、世に逢阪の關はゆるさじ。咄。

無字も隻手も同じものぢやが、模様をかへて織て見た。着具合は同

じこと。なんぼ行ても同じ道ぢや。印可證明とて別のことではあるまい。最初無字なり、隻手なりで、因地一下の場合が、即印可の時節ぢや。いろ／＼やらするのは本當に無字隻手が手に入つて居らぬからだ。南天下にはそんなことはない。最初が直に末後ぢや。しかし多くを羅列すると、その内に感應道交するものがないとも云へぬ。そこで檢定法中の拔萃をして、其模様を示すから、願力といふ無量のお金さへあれば、何時でもかつて着ることが出来る。要はやはり菩提心ぢや。

百四十八、乃木の自又は衲の送りし

由多加織の上

でやつた。一入感慨が深いやうに思ふ。伊丹の由多加織開祖寺西の

乃木の自又は衲の送りし由多加織の上

碑文を立つるに、其題字を乃木さんに書いてもらうた。そのお禮に由多加織を贈つた。それを常に敷いて居られた。其上でやつた。血汐で染つて居た。衲はこれを紀念にもらうつもりで遺族に申込だが、この血は永遠に保存せねばならぬとて呉れざりき。博覽會の乃木館には出て居つた。衲はしのびかねてその模様と同じ由多加織を拵へて、それを敷いて居る。寺西家の名譽なるべし。由多加織は藁の廢物利用で、乃木さんの理想にかなふてをる。實に立派な敷物ぢや。盛に歐米に輸出して居る。

百四十九、機關は禪の花

ぢや。機關は古より八境界の一に加へられてをるが、實は禪は皆機關ぢや。釋迦時代にも機關はあつた。外道問佛釋迦據坐良久の如き、

文珠をして藥草を擇ばしめ、盡大地藥ならざるなしと答へさした如き、且又拈花微笑は勿論、棺桶の中から兩足を出して見せた類。一切經の中にはこの例澤山ある。尤も百丈以前は多くは理致で行つた。人質が素朴で如實に受けこんだものだ。宋時代から儒學勃興して、性理大極無極の論や、老莊虛無の説が起つて、人心を攪拌したから、禪も一と通りでは擴まらぬ。不得止機關を設けて、餘計物をとる手段を講ぜねばならぬ。それが機關の起りぢや。そこで百丈以後に多く用ひらるゝに至つたのだ。機ははたぢや。表面は立派に織り出しても、裏には種々の仕掛がある。關所は表面は嚴かで、なんだか不可犯所があるが、裏は寛大な所がある。關所の役人など案外相談し易い者だよ。何方にしても賊意ぢや。うつかりすると尻の毛まで脱かれうといふやつぢや。聖一國師は禪を理致。機關。向上の三つに分け

て接衆の材料とされた。今は檢定法中重要の二三をあげて、初心晩學の資料に供せん。

百五十、機關の一斑

(1) 虚空を二つ三つもつてこい。虚空とは何ぞ。這箇是なり。即自己なり。自己とは何ぞや。虚空是なり。しかし虚空といへばもう迹がつく。小くなる。楞嚴といふお經には虚空を大覺に比すれば猶如海之一漚とある。大覺即ち無字の境界に比すれば虚空の廣きも大海の一つの泡のやうなもの。なんと大きい大覺ではないか。吾人の目的はこの大覺にあるぞ。虚空が泡のやうなものであつたなら、二つ三つ出すことはわけではない。それ其處にもある。彼處にもある。左轉右轉受用不盡。

虚空を笑はせることも、虚空と首引することも、虚空を括つてもつてくることがも、翻筋斗さすることも、わけは無い。

(2) 四十九曲山坂道を直に通らにや一分たぬと。粉引歌にあるが、どう直に通ると。これはよう手島悟にある。など見たやうな公案ぢやが、素人でもよくやるやつぢやが、そんなことで白隠がいふたのではない。四十九曲は荆棘林ぢや。すぐに透るは直下承當ぢや。單刀直入の所ぢや。荆棘打破の所ぢや。東山水上行ぢや。青山常運歩の境界ぢや。機轉悟りは、一休物語を讀めば分るが、禪がそんな物になつては佛祖が泣く。一休が曲つた松をまつ直に見よと云ふたら、蓮如が婉轉として龍の天に昇るが如しと書いたと。四十九曲ぢやから、曲りながら通れば、それが直ぐに透るといふ者ぢやなどと、理窟判斷では南天下では透れぬぞ。本當に遣つたらこの一則でも、埒開

くことぢや。容易の看をなすなくんばよし。而雖與麼瓠子曲彎々。冬爪直籠侗。

(3) 印籠の二重目から富士山を出して来い。火といふて口はやけぬ。水といふて渴はとまらぬ。富士山といふてなにも出ぬ。富士山といはなくとも富士山は一萬二千尺ぢや。所詮は名をとらへて實功をにがす。貪看天上月。失却掌中珠ぢや。立名認相皆爲欺誑と。東嶺は十重禁を頌せられた。とかくは未生已前になつて、いんろうをさぐれば出るものは、外ではない。これを富士山といふぢや。名は皆假故ぢや。

(4) 千里さきの燈を吹き消せ。大小圓融遠近一如の當體が手に入ればわけはない。唐土の山のあなたに立つくもは、にはに立つ火の煙なりけり。

(5) 徳利の中に這入てみよ。徳利に入ることが出来れば扇子の中にも、柱の中にも、煙管の中にも、爪楊子の中にも、自在ぢや。經には芥子に須彌を入るとあるし。録には藕線孔中弄快應ともあるぢや。萬象皆虚空に歸す。その虚空が大覺に比すれば粟粒ぢやと。宇宙皆自己なれば出入何か妨げん。能所不二。自他圓融の眞境を練すのぢや。楞嚴に十方虚空自他不隔毫端。三世古今不離當念とある。

(6) 口を開かずして念佛を唱へてみよ。淨土門の人にやらしたい公案ぢや。彌陀の願力もこの境界に至りては、退倒三千ぢや。一遍上人も法燈國師にこれで油をとられた。始めは唱れば佛も我もなかりけり。南無阿彌陀佛の聲ばかりしてとやつた。國師ゆるさず。三年の後唯なむあみだぶつなむあみだぶつと。こゝで一寸許した。唯の一字は口を開かぬことなり。そこで一遍又曰く、極樂へ行かんと思ふ心こ

そ地獄へ墮つる始めなりけりと。唯唱へる所には彌陀も居らぬ。極樂もない。こゝが眞の彌陀ぢや。彌陀とは無なり。趙州のことぢや。洞下これを無舌人の解語といふぢや。元來無口通身是聲ぢや。天地一聲ぢや。道元禪師曰く、
 生死可憐雲變更 生涯のことを譬へて見れば白雲の忽ち起つて忽ち消えるやうで、實にはかないものぢやと。しかしこの雲の變更も、雲になれば變更もない。生死になれば全機現ぢや。生死は佛の御命となるぢや。しかしこゝは凡夫沈淪界に約して唱へ出されたのぢや。迷途覺路夢中行 圓覺經に生死(迷途)涅槃覺路(猶如)昨夢とある。夢中の有無は悉く無ぢや。悟つたも迷ひ。別に悟るべきものはないではないか。迷も悟と違つたことはない。共にそれにつかはれる。悟れば佛見が起る。うつかり悟られもせぬぢや。

この二句は凡夫迷倒の衆生の有様ぢや。次の二句で生かして來た。唯留一事醒猶記 皮膚脱落有一眞實で、夢覺て見れば何にも無い。唯一つ迷悟にあづからざる底の一大事が心中に浮んで來た。何である。なに別に不思議な事は無い。折しもこの貧亡庵に隙間洩る雨が、しよぼく降ることのみぞ聞こゆる。雨が念佛申して居る。
 深草閑居夜雨聲 口を開かず唱へる念佛ぢや。水鳥樹林念佛念法の聲。夜來八萬四千偈ぢや。

百五十一、無舌居士圓朝

圓朝は嘶家の名人ぢや。一言忽ち人を泣かしめまた笑はしめ殆んど人心を自由に支配するやうに見える。偉らい男ぢやつた。これは全く山岡のお蔭ぢや。ある日山岡が圓朝に口なくして喋舌つて見よ。

そしたら嘶はなんぼでも上手になれる。どう考へても分らぬ。三年かゝつてもどうもいかぬ。ある日演壇にのぼつて桃太郎の嘶をするうちにふと舌無うして喋舌つて居つたことが手に入つて急ぎ山岡に入室して印可を受けた。何藝でも上手になると妙を得て、不知不知禪心に叶うて来る。それにも一つ眼睛を點すれば、宛然たる祖師様ぢや。念佛の坊さんが圓朝位の境界があると、往生は疑ひないぞ。いや世出世ともこの境界でやれば、何事も成就せぬは無。無手で働け。無足で行け。無念で思へ。極樂去之不遠ぢや。圓朝は死ぬる前に成佛したり。堂々たる金魚を帶ぶるの士、一演藝家に及ばずして可ならんや。經曰制心一處無事不成辨。

百五十二、一婆彌陀となる

鶴林說法曰。唯心淨土己身彌陀と。彌陀一現山河大地叢林一時放光明(放て居るが見えぬ)若人欲識得(但向自己方寸上)單々尋覓方寸上とは何處のことぢや。單々の處方寸なり。單々の處とは何處のことぢや。いへば早合點するから坐禪せば知れるといふて置かう(己是唯心淨土。淨土作甚莊嚴)己是己身彌陀。彌陀有甚相好と。これまでが白隱の說法ぢや。縁といふものは妙な者ぢや。婆聞きて思へらく、これは六ヶ敷ことではないと。家に歸つて日夜工夫す。寤て寤ることを知らず。寢て寢ることを知らず。一日鍋を洗ふ時、忽然として打徹した。直に白隱に見えて曰く、婆今己身の彌陀となつた。山河大地大光明を發するを見るといふて躍つて見せた。白隱曰く汝はさういふが、それなら糞壺の中から光明を放つ彌陀を捉へて來いと。婆は直に白隱に一掌を與へて曰く、老漢まだ分らぬのかと。流石の白隱

も笑つて休したといふことがある。そんぢよそこら借問す。看經念佛の老和尚管長連よ。日々木魚をならし口稱に長年月を費して得る所何事か。恐くは彌陀といふ否本願といふ百二十斤の重荷ならめ。この老婆に愧なきを得るか。

百五十三、淨土門でもほんまの者がある

元祿のころ二人の淨業者あり。一を圓恕一を圓愚といふ。二人志を同うして專唱怠ることなし。圓恕は山城の人也。唱念純一(即是禪也)果して一心不亂の境地(彌陀經の所謂)に到つて忽然として三昧發得し、往生の大事を決定す。(蓋し來迎をうくるやうな往生とは違ふぞ)茲に於て遠の初山に上つて、獨湛老人に謁す。湛問ふ。爾は何處の人ぞ。恕曰く。山城。湛云く。何んの宗をか業とす。恕曰く。淨業。湛云

く。彌陀如來年多少ぞ。恕曰く某甲と同年。湛云く爾年多少ぞ。恕曰く。彌陀と同年。湛云く。即今何の處にか在る。恕即左手を握て少く揚ぐ(彌陀を弄せるなり)湛驚て曰く。爾是真箇淨業の人なりと。圓愚も亦久しからずして三昧發得し、大事決定す。もとより自己の彌陀ぢや。やれば必ず得らるゝに違ひないが、眼のつけ處が違ふと、何時まで遣つても勞して功なしぢや。何うも淨土宗は修行が純一に無い。本願ぢやの彌陀ぢやのといふものや。自力他力など云ふそへ物がある。白隱は淨土門と禪との優劣を比して疑團の起り易きと否らざるとに歸す。疑團おこらざれば疑團になること能はず。無字等の公案は疑團起り易きがゆゑに、百中九十九は入るべし。淨土門はたとへ猛烈に遣つても疑團起らざるが故に三昧發得しがたし。百中一のみと。この圓恕の如きは純一にして名號を以て直に疑團となし。

淨土門でもほんまの者がある

聲をも捨て、彌陀をも捨て、本願をも捨て、心身をも捨てしなるべし。只一箇の南無阿彌陀佛の孤迦々露堂々たる疑團のみなりしことを疑はず。如此は名は淨土にして實は禪なり。願くは宗我を捨て、速かにこの妙境に體達して、大歡喜地を得よ。

(7) 三千佛を一體づゝ、茲に露して見よ。佛とはほどけるなり。解脱なり。見て見たつさり。聞いたら聞いたつさりて、更に餘念を交へざれば立派な佛ぢや。四祖が解脱の道を與へよと云うたら、三祖が何物か汝を繫縛するといふた。この身すでに縛を離る。諸法悉く寂滅の相なるを知らん。寂滅は何のくもさりの懸らぬ、妄想が滅じて真相が現はれた處ぢや。自己も他己も衆生世間も器世間も皆脱落し來つた。居る人は佛菩薩居る地は淨土なり。又何をか疑はん。これを實にするのが禪ぢや。こゝまで來れば三千佛を一體づゝ出すことはわけは

ない。傀儡師胸に懸けたる人形箱佛出さうと鬼を出さうと。しかし眞に其境に達せずして、その眞似を遣るのは偽禪ぢや。偽禪は地獄の因なり。可恐可恐。

(8) おばけを濟度せよ。お化も相手が無くなれば出た甲斐はあるまい。唯無憎愛洞然明白なりぢや。おばけは愛憎のかたまりなり。しかれども違順僅起紛然失真。これおばけなり。おばけが、おばけになるほど立派な佛は無い。おばけが笑ひでもしたらそれこそ變佛ぢや。ある人おばけの濟度はおばけになりさることぢやと聞き、おばけの眞似をして呈したら、師家の方で御苦勞御苦勞、何時までもさうして御座れと。おばけになりさることが出来れば何にでもなりきらねば濟度ではあるまい。なりさるとは自己を捨つるなり。自性なきなり。自由の分なくんば何にせん。無門をして、依草附木之精靈と罵らしむるなくん

ば可し。

(9) 走り舟をとめて見よ。汽車の出るのを止めて見よ。雨滴の音を止めて見よ。即今止めたぞ見えぬか。走る舟は走るとは思はぬ。この自己が走るとねだんをふむ。雨は只降る。音を立てるとも思はぬ。反て我は耳根をけがす。舟になれ。音になれ。只これ自己を忘ぜしむる先達の血滴々なり。機關は容易の看をなしてはならぬ。「向ふがしの喧嘩をとめてみよ」これでは烏尾居士が三年かゝつた。梅田の停車場で車夫の喧嘩を見て、忽然として透過したとのはなしがある。道は近にあり。反てこれを遠きに求む。

機關の終りに、學者入り來りたらんに、師家は唯面壁してなにもいはず、衲僧下なればこれをすぐに此方に向けて見よといふのがある。仙崖はそなひに拗ずとこちむかしやんせ、あぢなはなしがあるわいなとい達磨になれ。

百五十四、法身一斑

法身とは本體なり。本體明なれば差別了然たらざるべからず。法報應三身即一なればなり。法身を毘盧遮那と云ふ、遍一切處と譯すぢや。されどさういかぬからこの公案が出る。正位に正を取るを警められた。眞の法身なれば、いふことは無い。法身無相ぢや。これで迷ふものも、これで悟るものもあり。法身覺了無一物。本是眞壁、平四郎ぢや。とかくは法身邊量に陥りやすい。今こゝに法身と出すは、法身の病を治するの名なり。毒を以て毒を制するなり。初心の禪學者は、機關法

身といへば馬鹿にする。けしからぬことぢや。

法身で有名なるは傳大士法身偈。空手執鋤頭(鋤)。步行騎水牛(騎)。人從橋上過橋。橋流水不流(水)。

杜順和尚。懷州牛喫禾(喫)。益州馬腹脹(脹)。天下覓醫人(醫)。灸猪左膊上(灸)。

洞山初和尚。五臺山上雲蒸飯飯。古佛堂前狗尿天(尿)。刹竿頭上煎鑊子(鑊)。三箇胡孫夜簸錢(簸)。

この三つは叢林でやかましいが、一つでも本當に手に入れば外には入らぬ。なに自分さへ確であればこれも入らぬ。古人は傳大士の頌は、杜順に劣り、杜順の頌は洞山に劣り。洞山の頌は葡萄の棚に劣るというた。葡萄は甘い、法身は甘味がないと奪ひ取つたも、已に足る所があるからよ。不見言美食不中飽人喫。

しかし南天下で有名なるは、

百五十五、荷葉團々

團似鏡。菱角尖々尖似錐。風吹柳絮毛毬走。雨打梨花映蝶飛。これは大恵が圓覺經の要所の居一切時不起妄念。於諸妄心亦不息滅。住妄想鏡不加了知。於無了知不辨眞實。といふ偈を頌したので。居一切時不起妄念。なに妄念は起つて居らぬ。逢茶喫茶。逢飯喫飯。ぢや。その時何物かある。然るに順逆の境に處するとさうはいかぬ。されば逢茶喫茶も實には夢に妄念を起さざりしまでなり。實は御本尊は至てあやしい。そこでこの語が必要ぢや。妄想起らざればそれが直に眞實なり。寂滅なり。荷葉團々團似鏡。なに荷葉は何とも思はぬ、鏡に似たとは大慧の妄想。荷葉が定めて笑うであらう。大慧も

其手のつかぬ意識のつかぬ荷葉を頷したのよ。荷葉になれ。荷葉になれ。白隠の間蟻争拽蜻蜒翼もまだ／＼おつつかぬ。微細の識が残つてをる。於諸妄心亦不息滅。妄想は何物ぞ。憎ひ可愛い。惜しい。欲しい。もとこれ自性なし。體性を求むるに不可得なり。滅せんとして滅すべき自體あることなし。滅せんと思ふ念は即妄分別なり。故に曰く、念起是病。不續是藥と。念起らば覺せよ。覺すれば即無なり。覺すれば念は何物ぞと參究せよ。必竟空に歸すべきなり。妄心しば／＼起れば真心いよ／＼明鏡なり。只本分にくらからずして妄想に眼を懸ざれば何時の間にか妄念は居らぬ。はやその妄念は眞實なり。前念は是凡。後念は是佛ぢや。妄念は固體で無い。何時までも續くものでない。妄念の上に妄想はない。妄念のまゝに安住すれば妄想自から解脱の相なるべし。それを菩薩以煩惱成菩提。凡夫

以菩提成煩惱といふのである。菱角尖々尖似錐。菱角は池に出来る菱ぢや。菱餅を拵へて食ふ處もある。皮にとげがある。尖があるとも思はぬ。荷葉のはちすばは、おれは圓いとも思はぬ。圓と尖とは順と逆。善と悪と比較を出した。しかしかればちすが、かれひしは何とも思はぬ。只圓い。只とがる。ひしになれ／＼。新燕双鷗揚柳枝。

これでもとどかぬ。
住妄想境不加了知。古人は此語就中最も親切なりといへり。境は元來自心の所現なり。その上に了知を加ふれば現量即ち無分別智に迷ふ知見を起さは比量に落つ。非幻成幻が如し。心不見心。自心の外境を求むるば眼々を見んとするが如し。加ふとは知の上に加ふなり。住するは其物それきり。見たら見たつなり。更に見るを要せざるなり。死なば死ね、生きなば生きねなにもなし其外何の思ふことか

は。風吹柳絮毛毬走。風めが無心に柳の絮を吹き散すは、毛虫の
ぶかと思はるゝ。柳無心風無心。そこで柳に風折れなしぢや。太く
ても柳はやはり柳かな。白隠は蠶婦携藍多菜色といふた。遠而遠ぢ
や。

於無了知不辨眞實。無分別結構なれど。これにも住すべからず。所
住なき所是眞實の所なり。別に眞實といふものがあるのでは無い。
妄の息んだ所が直に眞實ぢや。これは無了知の病を破したのぢや。
無了知直に眞實なれば、別に眞實を辨じやうがない。求めやうがない。
難有い詞ぢや。圓覺經楞嚴經は偽經といふが、よほど偉い人が作つた
ものらしい。偽經といふ御本尊の道元。如淨も。しばし用ゐられ
た。禪者の讀むべき本ぢや。雨打梨花映蝶飛。梨の花が散る所蝶に
見える。なしの意もない。さすが大慧古佛ぢや。白隠は村童偷筍過

疎籬。これも及ばぬ。

この經もこの頌も中々容易ではないぞ。法身とて馬鹿にならぬ。禪
の極意は法身に在りぢや。五位にも不入涅槃にも、何にも應用が出来
る。

室内で物眞似して丸を書いてもそれは駄目。やはりこの頌の諱にふ
れるぞ。衲の室内では中々透さぬ。この荷葉團々の法身は千七百則
を一串して居る。中心點となつて居る。大慧は但將此頌放在上面却
將經文移來下面頌却是經。經却是頌と。經は頌を解釋するもので従た
り。頌は主たる者になる。禪は佛心なり、經は佛口なり。あゝ同一
の論ならんや。
法身の則も澤山あるが、何れも融通するから、それにとても短篇には書
ききれぬから、法身はこれでよく。

百五十六、言詮一斑

古人の言句を撮來り、禪意を了するなり。詮は證明なり。蓋し言詮を以て言詮不及の處に到らしめんとなり。これが言詮の功果なり。以て擲擲以言遺言。たとへば擊柝の聲は聲なりといへども、この聲により衆人皆黙して一場靜平なるを得るが如し。

(1) 不明三八九對境多所思、不明三八九不免自沈吟ともある。昔東奧大岳の徒回首座なるもの、正受老人をとふ。折柄不在。母公接す。回云庵主何處去と。其言いかにも不遜なりければ、母は少し弄して曰、庵主在上座肚裏著草鞋、豎四横三なり。それに何故知らぬのだと。回云御前もちと遣るな。母公曰、古人道不明三八九對境多所思。是什麼義、回擬議。母即執杖打趁出すといふことがある。さすがは正受老人の

母だけある。其外支那で靈巖の安禪師が、圓悟の首座との問答にもある。その問答が中々面白い。首座問、玄沙白紙此自何來、玄沙がなんにもかいてない白紙手紙を雪峰に送つた事がある。今安が師匠の書面をもつて來たからそれに因てこの問が起つた、安提起書曰、見麼、さあ見いと出した、首座引手措、(とらうとした)安復執却曰、だんだん手紙を引こめて曰く、久默斯要不務速說、法華の語久しく大事の事を秘しておいたが、機未だ熟せざるが故なり。今は拜呈幸希一鑒と。首座使喝、安曰、作家首座。(やりてぢやなあゝと弄した)首座又喝、(再犯不容)安打一書、書翰で打つた、首座擬議、安曰、未明三八九不免自沈吟。又以書一下曰、接なせこれをとらぬのかと。安はかなり問答の名人ぢや、三八九の事は虚堂録にも出て居る。三八九とは何のことぢや。三八九は三八九よ。坐禪は坐禪なり。坐禪を坐禪なりと知る人稀なり。只所思多き所に眼

をつけて三八九の一大事を閑却して居るものが多いぞ。それ風が吹くこれ何ぞ。あれ雨が降るは何ぞ。頭痛がする。腹が痛い。あゝ苦しい。もう息が切れる。これ何ぞ。三八九めが何處にも彼處にも跋扈する。不見言象王踏處絶狐蹤。三八九になれ。三八九になれ。

(2) 君子愛財取之有道。これは洞山曉聰禪師の語ぢや。ある僧の既是泗州大聖。爲什麼却向揚州出現。と問うたに答へたのだ。蓮花峯禪菴主大に驚いて曰雲門兒孫猶在と禮拜した。論語にある語ぢや。君子千里同風で僅に五七言を聞いて梵香禮拜す。たれかこれ今日かれの知音たる者ぞ。道といふ字が字眼ぢや。畫龍不點睛ば死んでしまふぞ。修行も道を得ざれば外道になる。菩提心がなければなんぼ悟が豊でも皆ゼロだ。只是願力の廣大なるが爲めに春朝盜をなして、獄人を教化し度しをはるとしばしば竊盜して同じく監獄を教化す。要は

菩提心ぢや。さあ菩提心とは果して何物ぞ。龍樹は菩提心論を著して微細に論じた。明惠は三字を本尊として日々禮拜したとあるが即今目の前に菩提道心を出して見よ。しかあらばこの言詮はわけはな

く透過する。長者長法身。短者短法身。大葉有大佛。小葉有小佛。而雖與麀夜中莫踏白非水即是石。

(3) 木鷄鳴子夜。獨狗吠天明。木雞とは何のことぢや。藁で拵へた狗が夜明け方に遠吠したとは何んのことぢや。鳴の時。吠の處。これ木か。これ藁か。これ木なり。これ藁なり。意識なければなり。非木非藁鳴ばなり。吠ればなり。この非有の間を透得すれば、乾坤に獨歩せん。しかし孟嘗君の鷄鳴狗吠と混同する勿れ。かれは物あり。われに物なし。與物不拘脫體現成。これこの則の要所なり。

(4) 微風吹幽松近聽聲愈好。これは寒山詩ぢや。寒山になれば分る。

(5) 敲空有響打木無聲。これは空となり響となれば分る。空の自性なき事は、木の自性なきが如し。此故に因明に曰、聲無常也處作性故。猶如瓶等と。無常即無自性なり。陳那菩薩も可い事を云ふた。安禪必不用山水滅却心頭自涼と。出處は婦人の語ぢや。たしか東坡の妾かと覺えた。快川樓門上に焼立てられての最後の一句ぢや。火にならねば分らぬ。惠舜尼は自ら火定に入つた。即今なんと火定に入るぞ。(6) 古徳曰白蓮白蓮。これは何のことぢや。何をさして白蓮といふぞ。聲もと自性なし。白蓮も亦復如此自性がなければ何にでもなれる。左右を顧視して曰、看看。(7) 萬象之中獨露身是撥萬象不撥萬象。これは長慶の鎖口訣ぢや。どんな漢でも閉口するよ。如來有密語迦葉不覆藏ぢや。何の撥不撥とか云はん。獨露身が邪魔になる。云ふまいと思へどけふのあつさ哉。

なにそれも獨露身よ。嫌ふ底の法はない筈ぢや。(8) 萬頃荒田誰作主。荒れ果た誰れか鋤て呉れよ。今日の如く禪苑が荒陵しては、この衆生を如何せん。たれか其主將となる。只是衆生無邊誓願度。言詮もいろ／＼あるも限りなきを奈何にせん。強ひて書かんとせば言詮めが話墮了也と笑ふであらう。

百五十七、川中島の禪戰

紅爐上一點雪。これは大事な則ぢや。川中島の時、謙信幕直に陣中に入り、信玄へ向つて眞甲に太刀振り上げ。如何是劔刃上事と問ひ懸けた。擬議せば眞二つぢや。危険々々といふ所だ。さすがの信玄將凡に腰打懸け少しも騒がず、泰然自若として軍配を以てはつしと受け

とめ。紅爐上一點雪と答へたら謙信すかさずとけて流れて犀川水潺々といふて又切込んだ。この時衲僧下ならば何んと答へて死中に活を得るや。紅爐上に一點の雪が降れば直ぐにとける。痕跡も無い。怨も消え、怒も消え、身も消え、心も消えて、なんにも無い。何にも無いに腰を据ゑると、戦さも出来ぬ。商買も出来ぬ。さすが謙信ぢや。とけて流れて大自在ぢや。雪がとけて怨みはないが軍人なれば軍はせにやならぬ。とけた水なら流れにやならぬ。どう流るゝ。やはり敵を屠るの外に行き處はない。好雪片々不落別處の意味合ひぢや。こゝまでいふたら分るだらう。擬議せば一刀兩断ぢやぞ。速道速道。因に謙信は宗謙和尚、信玄は快川國師について、何れも盛んに禪を修した人。平生のお仕込が實地に應用された處ぢや。信玄の辭世の語あり。大抵還他肌骨好。不粧紅粉自風流。軍人は赤裸々の軍人になれ

ばよい。乃木はいつも軍服を着て居た。寝ても軍人ぢや。起ても軍人ぢや。所謂寤寐恆一ぢや。乃至農工商それくその物になりきり、餘念を交へず。三昧にはたらく。即ち紅粉を粧ばざる處即心即佛の境界なり。白粉をつけて汚した後家の顔。

百五十八、法窟の爪牙一斑

檢定法は中々多いから拔萃でも小冊子で盡きることゝ無い。今はほんの大略だけ擧げて置かう。

(1) 二祖の腕を持って来い。二祖は達磨の前で雪中に立て腕を斷つた。爲法身命を抛つといふ精神を見せた。それは難有い千五百年前の事ぢやが、その腕を今こゝへ持て来いといふのぢやから難則ぢや。無字さへ分ればわけは無いが、さあかう名がかはつてをるときよろつ

くは、未だ力が出来ぬからだ。まあ二祖の腕とはなんであるか。出さるゝものか。出されぬ者かと参究すべし。何に比較した名であらうか。無論這箇ぢや。人々具足箇々圓成のものぢやから、這箇やとりするもので無い。そこが分つたら、強ひて問へば一掌を興へて、反て向うの反省をうながすがよいが、こゝに室内秘密の調あり。千七百則にもかけあふ。この一則で十分だ。そこが法窟の爪牙ぢや。いや無字も究極すれば同じものぢやが、無字の真似を簡別する方法中の尤も悪毒なるものを指すぢや。八難關の犀牛の扇子が即ちこれぢやが、八難透の調べに行くと、もう忘れてしまふ。附燒刃ははげ易いぞ。しかも興廢なりと雖も、恐くは勞而無効、參じて知るが可い。

(2) 急々如律令。まじなひぢや。何んな病でも癒るぞ。なぜこれで直

るのだ。直る意味を説明して見よ。これは臨濟の全體作用といふのが手に入るとわけはない。日消萬兩黄金といふて居る。なんと自在のものではないか。急々は最速力を云ふ。律令は捷速鬼というて瞬間に千萬里を走る鬼ぢやが、石火莫及、電光罔通をしばらく譬へたまでぢや。圓悟は矢過新羅といふのがえて吉ぢや。それもまたこの一句には及びもないぞ。教意にも祖意にもたがはぬ。急々如律令を呈して看よ。擬議せば南天棒。

(3) 君子可八。悟は十成を忌むぢや。萬事は控へ目が可いぞ。そこで八に可なり。これがほんまの大人君子ぢや。大慧の禪は蚪蛤禪というて、何もかもいうてしまふ。口あけば腸見ゆるあけび哉ぢや。そこで兒孫が斷絶した。松源禪は省數錢ぢや。當百ぢや。百に足らぬ天保錢が難有い。二つしまつてあるこの二つが恁んなにも働く餘地が

ある。曹洞の宗旨がこゝちや。馳書不到家といふが君子可八ちや。今の禪は松源の兒孫ちや。省數錢の然らしむる所ちや。なぜか。疑團を起さしめて自發の機を興へるからちや。因地下は恚うしても松源黑豆の禪でなければ得られぬ。黑豆は見れども見えず。取れども取れぬやつちや。この君子可八はまだそれ以上ちや。東山下の暗號密令ちや。雲門錄に出てをる。ある書に忘八に對し、仁義禮智孝悌忠信の八を指すと云ふは俗説ちや。咄。放下著。即今君子可八を出して來い。參じて知るが可い。

(4) 握拇指咬中指 無功用の境界が手に入らねば分らぬ。只是握拇指咬中指 參じて知るが可い。

(5) 燈下不剪爪 灯下に爪を剪ると疫病神のはやるときは皆死するとの諺ちや。今日の公案は燈下に爪を剪つて居るのではあるまいか。

御用心御用心。參じて知るが可い。皆暗號ちや。

(6) 天下を太平にすることは不問。這箇の杖子作麼生が云へ。というて投げ出す。一人は曰、識得杖子一生參學事畢矣と。一人は曰、識得杖子入地獄如矢と。さあ何方が可いか自己の見識で看破れえ。こんな棒などに用事は無いわいと其棒を投げ返すやつがある。そんなまどろひ事では法戰場であかぬぞ。棒のやりとりに室内の極秘がある。力が出来れば獨りて分る。和尚の棒折るゝなど云ふをきいてさつた人もある。霍山は秘魔岩の木叉を奪取つた。岩は山の背を打つこと三下した。山はいうた。三千里外おれをだましたな。知音同士のことちや。今この杖子の則は如何しても八幡の南天棒を出さねばならぬ處ちや。不見言道得南天棒。道不得南天棒。

(7) 一切衆生皮骨を包む龜何によつて骨肉を包むぞ。會元に出て居る

僧が斯様に問ふたら、大隋和尚が草履を脱いで龜の背上を覆ふたら、僧が無眼子で無語であつた。衲僧下なればどういふぞとなり。又大隋はなぜ草履を覆ふたかと拶す。虚堂は神照無此作。神照は大隋のことぢや。なに大隋はそんな作略をするものか。何かの間違であらうよ。體よく奪取つた。僧曰。初秋夏末衲子往來。牢記取者一轉語。舉似諸方。よいことを聞きました。これからあなたの神照無此作略といふ語を記憶して、どいつが來ても閉口さしてやりましょう。自己の安心底はどこにあるのぢや。てんで問答を覺えて來たのぢや。これが勝他禪ぢや。今もこれが多いよ。そこで虚堂は苦哉といふた。あゝ又言句になづむが、守株待兔徒勞ならんのみ。大隋や虚堂にあづけることではない。脱落底の一句作麼生。速道速道。

(8) 師火箸二本を出して、この火箸地獄へゆくか、極樂へゆくか。火箸は

本來鐵ぢや。鐵は火箸にもなる。佛にもなる。鬼にもなる。大砲にもなる。レールにもなる。血にもなる。藥にもなる。火箸が火箸といはぬのは、火箸に自性の無い證據。何時でもとろけて鐵となるのを惜まぬぞ。地獄へなりとも極樂へなりとも勝手に行くはい。これは所謂六道四生遊戯三昧ぢや。火箸になれ。いな鐵になれ。

(9) 上座は破參の衲子五位十重禁も濟んだといふが、さあ一句云へと云うて、學者の鼻をつまむ。佛界であらうが。魔界であらうが、佛には入るべきも魔には入るべからずとて、魔に入りて魔惑を蒙らぬのは、中かたいぞ。佛魔同相と行かねばならぬ。今はそんな猶豫はならぬ。いよ、斷末魔の境界ぢや。鼻をつままして居るのぢないか。これらが室内の花ぢや。學人の氣狂になる所ぢや。速來。速來。

(10) 又同様に云ふて、學者の手を握て、さあ一句いへ。又同様にいふて、片

足の足袋を脱いで出す。皆類則ぢや。一つ透れば瓦解氷消ぢや。
 (11) 學者入室すると直に五位は何うぢや。速道々々。五位は馬鹿にならねば分らぬ。たとへ答へ得て誦當なりとも其境界に達せねば無駄ぢや。

(12) 夢に屁ひつたといふが其屁の臭ひを此處へもつてこい。これ又馬鹿にならねば分らぬ。臨濟四喝の内の一喝不作一喝用に參ずると分る。法窟の瓜牙には臨濟録も乃至五位もこもつてをる。別けて南天下は天下無敵ぞ。臨濟曰。漚和爭負截流之機。漚和は方便で諸方の室内で從門入者で口授され筆授されたやつぢや。截流とは象兎馬渡河のたとへて象は底に徹して流れをきつて進む。大菩薩の修行にたとへた。相似の師家では大機の者を脊負ふことが出来ぬ。
 (13) 昨夜泥牛入海去。直至如今無消息。泥牛とは何のことだ。おれの弟

子に泥牛といふやつが居る。碧巖には鐵牛の機といふのがあるが、それよりはまだ上手だ。我這裡無這箇。消息はまた一段ぢや。この則などは法窟瓜牙中の難關で學者の汗をしぼる處ぢや。柳標横擔不顧人。直入千峰萬峰去。

百五十九、無門關一斑

(1) 或庵曰。西天胡鬚依甚無鬚。達磨さんに何故鬚がないか。こりや無門關中の難則ぢや。鬚の會をなしたら地獄へ眞逆様。無字の中峯八個の無字が分ると、これも分らねばならぬ。まあ無心になつて西天胡鬚依甚無鬚と唱へて看よ。身心如何。行李如何ぢや。何物がある。只八字の聲のみありて、天地一枚なり。今日飯を食ふ。これ何ぞ。水を飲み。寝る。起きる。たれる。ひる。何ぞ。この聲とこの事と。

これ同か。これ異か。この故に或庵は餓狗咬絳纒といった。水庵聞て曰。此是五百人善知識語と讚めた。絳纒はぼろくづぢや。何の意もない。しかし勞して功なしぢや。好事不如無ぢや。これで大安心が得られねばだめよ。一字一字に參じて看よ。不思拍手大笑。諸方で鬚の眞似をする轉沒交涉。

(2)大通智勝佛。十劫坐道場。佛法不現前。不得成佛道。時如何。讓曰。其間甚諦當。なるほどその間の通りさうなければならぬ。成佛を求めたら成佛はいつまでたつても出来はせぬ。とつくに成佛して居るものを。十劫はあるか。千劫萬劫無駄のこと。こゝで埒開ねばだめだぞ。臨濟は汝等信不及なるが爲と叱咤した。こゝに至りて少く精彩をつければ乾坤に獨歩するであらう。

僧云。既是坐道場。爲甚麼不得成佛道。坐禪は成佛が目的であるに、十

劫も坐つて成佛が出来ぬとは、合點が行かぬと難じた。諦當の二字で大悟せねばならぬ處。氣づかぬは可惜乎ぢや。そこで切斷法を用ゐた。讓曰。爲伊不成佛。伊は大通をさすが、暗にこの僧にあてた。汝が成佛せぬまでよ。とつくに光を放つてをるのがわからぬか。地獄に

行きたけりや勝手にさらせと、つきはなした所に大慈大悲。無門は氣をつけて、只許老胡知不許老胡會といふた。只自知するを要す。成佛の會をなさば、入地獄如箭ぢや。とかくは其者にならねばだめ。聞いたのではだめ。實地見ねばあくものでない。廬山烟雨浙江潮。不到千般恨不消。到得歸來無別事。廬山烟雨浙江潮。どうして一廻は行つて看ねばだめ。何處へ行つて看るのぢやと參究せよ。やはり外にはあるまい。五祖云。舉則公案。事々成辨。向外馳求。痴漢痴漢。水に居て渴を叫ぶは馬鹿のこと。悟りの運上は入らぬから、

自分のものぢや、遠慮は入らぬ。そこで無門が頷に、若也身心俱了々神
 仙何必更封侯。神仙は不老不死ぢや。釋迦を金仙氏といふぢや。
 大名になりたくもない。求むる所はなんにもない。許由耳を洗へば、
 務光は其下流を牛に吞ませなんだ。さうまできれいにならねばだめ
 だ。了々の二字衲の氣に入らぬ。脱落の二字にかへたいな。食うて
 寝て死ねばこつとり自由なり、佛になすな、あたらしこの身を。世間多少
 守株人。掉棒擬打天邊月。

よくこの意を了ぜよ。もしまた擬議せば南天棒。
 (3) 如何是佛祖云、即心即佛。即心即佛と一聲佛を投げ出した。何も手
 がつかぬ。自性がないからだ。唱へかたで力がわかる。無眼子の師
 家が見分がつかずについ學人をくさらかす。即心即佛に自性がない。
 固定しないから。ある時馬祖に佛を問うたら、非心非佛と答へた。且く

いへば非は掃蕩ぢや。向ふの機に應じた。即は建立ぢや。今は向ふ
 の相手を看ぬからそんな講釋はいらぬ。根元に蕞入して這箇の一聲
 とし、無孔鐵鎚當面擲ぢや。一枚物は反て看にくいぞ。もしそれ雲門
 底ならば、擧起分明といふであらう。

(4) 雲門因僧問、光明寂照遍沙河。人々光明のあるありぢや。人々の光
 明といふものはどの様なものぞ。鼻孔裏に飯は喫せぬ。在眼見。在耳
 聞。在口味。足運搬。手執捉。別に不思議なものではない。光明と
 はまぢがはぬことぢや。自己すでに明かなれば、萬法も亦明かぢや。
 とも疑ひをいゝ餘地がない。こゝ、沆河沙の諸國土、即周遍法界ぢや。
 この僧光明を認めてありがたやになつて來た。さすが雲門見てとつ
 た。次の句をいはすと、ますます妄想を増すと思つたから、第一句未
 だ終らざるに打消した。

一句未絶門遽曰。豈不是張拙秀才語。それは人の物ぢや。即今汝の光明はとなり。この僧鈍漢故分らぬ。正直にうけた。しかし雲門の句中に機をかくす所は中々看えぬよ。僧云。是。はい左様で御座る。狂狗逐塊ぢや。

門云。話墮也。そりやいひぞこなつた。

この則は衲が阿波の文靜に在て大に得た則で忘るゝことの出来ぬ則ぢや。これから道得南天棒。道不得南天棒が脱化し來つた。白雲の未在もこれぢや。なんといつてもいへばそれだけ餘計ぢや。物は一パイ一パイぢや。これより外にもものは無い。そのものそれさり。地限り場限り。もし他にいふことあらばそれだけきずぢや。古人は好肉剗創というてをる。そこでこの話墮了也がきいてをる。南泉が如夢相似といふもこゝぢや。この宗旨が手に入れば法に於て大自在が

得らる。首山竹篋背觸の話もこれで自由ぢや。

後來死心拈曰。且道那裏是者僧話墮處。死心和尚もさる者ぢや。劈腹剗心の手段を用ゐた。南天棒曰く。そりや又いひそこなつた。かう

いふたら死心も呵々大笑するであらう。無門關四十八則は他家の夢にだも看ぬ調べが澤山ある。いふて可いことだけをいふておきたいが、とても小冊子の許す所でないから惜しき筆を擱かねばならぬ。

百六十、徳本行者の念佛

行者は優婆塞の譯ぢや。有髮の修行者ぢや。尊んで上人とは云ふが、實は行者ぢや。かれ曰く十萬億土に行くには足が丈夫でなければ行けぬ。片輪念佛では行けぬ。おれのはほんとの念佛ぢや。諸方はし

いらぢや。地獄の因ぢやとて、六字を一字々々なりきらした。まづな
 あゝと一枚。聽衆一同になあゝとなりさる。次にむゝと一枚。次々
 一字づゝなりさり。それから南無阿彌陀佛と。我を忘れて大聲に唱
 へさした。これぞ一遍の唯南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛ぢや。徳本の
 念佛は南無阿彌陀佛というて、つを略した。一枚になりやすければな
 り。乾屎橛。麻三斤等の一枚物と少しもちがはぬ。眞に念佛の時は
 實に可いが、さて念佛からたつとさあ極樂が氣にかゝる。本願が眼に
 さはる。千仞の功を一簣に失するぢや。もと他力といふ邪魔物があ
 るからだ。これは宗旨の立て方ぢやから、此方を兎や角云ふ必要は無
 いが、いかなる英雄も邪宗に入らば油の麵に入るが如くて出離の期は
 あるまいぞ。嗚呼可惜乎。

百六十一、碧巖一斑

碧巖は圓悟と雪竇の血滴々で、古人圓竇經と名けたは中れるかな。大
 慧はこれを焼いた。掃蕩したのだ。張氏は二百年の後再刊した。こ
 れは建立した。掃蕩で洗ひあげねば建立もきずだらけぢや。建立が
 なければ掃蕩も斷無の見に過ぎぬ。後から推す前から挽く、車の行く
 と同じことぢや。どちらもなくて叶ぬ。其間をきりぬけて行く碧巖
 否大法の大白牛車が轉轆々地ぢや。碧巖にはみぬくい則が澤山ある。
 古來學者が頭をなやます。七部の書の中でも、碧巖は法の深淺を知る
 が爲めに讀むといふてある。これ又百則、とても一々はとけぬ。二三
 の要則をあげて置かう。

(1) 龐居士辭藥山。山命十人禪客。相送至門首。さすが龐居士ぢや。俗